

ふるさとへの誇りをもち、生き抜く力を育てる
「ふるさとなみえ科」の実践 ～5年間の歩み～

～小さな学校で 大きな感動を～



探究的な見方・考え方から
深い学びに発展させる

アクティブ・ラーニング

ふるさとの「ひと・もの・こと」を生かし
学びに向かう力を育む

カリキュラム・マネジメント

学びの可視化と
学びの環境づくりとしての

まるごとふるさとなみえ博物館

浪江町立浪江小学校・津島小学校

【目次】

I 「ふるさとなみえ科」とは	
1 学校・地域の特色及び現状について	1
2 教育目標・学校経営の方針について	2
3 「ふるさとなみえ科」について	2
4 「ふるさと創造学」について	4
5 より魅力ある「ふるさとなみえ科」をめざして	6
II 「ふるさとなみえ科」5年間の実践経過	
1 「ふるさとなみえ科」創設と「ふるさと創造学」への先行的な実践期 H24・H25	6
(1) 「ふるさとなみえ科」の基本構想	7
(2) 2年間の実践経過	8
(3) 主な実践例	9
2 より探究的な学習へ深化する「ふるさとなみえ科」の実践期 H26～H28	
(1) 重点的に取り組んだ事項	13
(2) 3年間の実践経過	13
(3) 主な実践例	14
(4) 魅力ある「ふるさとなみえ科」のための学習指導過程の工夫	16
III 「ふるさとなみえ科」5年間の実践を振り返って	
1 特に成果がみられるもの	21
2 「ふるさとなみえ科」探究の在り方の成果	21
3 学習の成果普及・受賞等	22
4 児童の顕著な変容等	23
IV 「ふるさとなみえ科」5年間を振り返って	23
【資料編】	
○ 子どもたちから大人たちへのメッセージ～浪江の将来を願い（H24）	24
○ 国連持続可能な開発のための教育の10年 （2005年～2014年）ジャパンレポート	25
○ なみえっ子カルタができるまで	27
○ なみえっ子カルタ50音・ジャンル別一覧	28
○ 第31回時事通信社「教育奨励賞」努力賞受賞校紹介（内外教育）	29
○ 小学館「総合教育技術」2016.9月号掲載 「アクティブ・ラーニングで学ぶ意欲を育てる」	31
○ 平成28年度単元指導計画（3・4年、5・6年）	35
○ 「んだげんちょ」歌詞	39
○ 平成28年度「ふるさとなみえ科」実践ダイジェスト	

ふるさとへの誇りをもち、生き抜く力を育てる
ふるさとなみえ科の実践 ～5年間のあゆみ～
～小さな学校で大きな感動を～

浪江町立浪江小学校・津島小学校

I 「ふるさとなみえ科」とは

1 学校・地域の特色及び現状について

平成23年3月11日の東日本大震災と原子力発電所事故で全町避難を強いられ、町立の小学校6校・中学校3校の全ては臨時休業となった。

東日本大震災以前、浪江町には浪江小学校だけで558人、他の5校を合わせると千人を超える児童が在籍していた。原発事故後は全国各地に避難し、2011年8月1日に二本松市の旧下川崎小学校跡で唯一再開した浪江小学校には、28人が戻った。その後、津島小学校は、平成26年4月に再開した。

震災・原発事故後の浪江町の小学校の状況

2011. 3.12	原発事故により津島地区へ避難開始。人口 29,908 (2010 国勢調査時)
3.15	二本松市へ避難。役場機能を二本松市東和地区へ、5月には二本松市中心部へ移転 (3/27 現在、小学生 1,162 名、中学生 610 名。浪江小学校 558 名、幾世橋小学校 122 名、請戸小学校 93 名、大堀小学校 157 名、荻野小学校 174 名、津島小学校 58 名)
4. 6	公立小・中学校入学式。浪江町の子どもは、すべて区域外就学
4.11	学校再開に向けての検討会議の設置
6. 8	学校再開に向けての保護者への意向調査開始
7.12	二本松市から借用した学校再開予定の校舎除染開始
8. 1	浪江小学校・中学校教職員人事発令
8.25	浪江小学校・中学校の開校行事、2学期開始 在籍数 浪江小学校 28 名、浪江中学校 33 名
2012. 4. 1	浪江小学校 在籍数 28 名 「ふるさとなみえ科」を軸とした総合的な学習の時間スタート
10. 1	浪江町役場移転 二本松市北トロミ 573 番地(二本松市平石高田第二工業団地内)
2013. 4. 1	浪江小学校 在籍数 17 名 警戒区域が、「避難指示解除準備区域」「居住制限区域」「帰還困難区域」に再編
10. 4	復興庁・福島県・浪江町「浪江町住民意向調査」実施 子育て世代ほど帰還指向は低い 「現時点で戻らないと決めている 20代:61.9%、30代52.6%」
2013.10.30	浪江町立小・中学校全校再開に向けた就学意向調査開始
2014. 4. 1	浪江小学校 在籍数 19 名 (8.1 現在:在籍数 18 名) 津島小学校開校 在籍数 3 名
2015. 4. 1	浪江小学校 在校生 11 名、津島小学校 在校生 3 名 (4月1日現在)
9 月	福島めばえ助成金による「なみえっ子カルタ」づくり～11月
～11 月	福島県立博物館の協力による「まるごとなみえ博物館」づくり開始
12.22	浪江町への「なみえっ子カルタ」贈呈式実施 100セット贈呈 200セットは県内外の支援者へ送付
2016. 2.27	浪江と多摩をつなぐ和太鼓コンサートに参加 主催:東京多摩市桜ヶ丘商店会連合会 第35回せいせき桜まつり実行委員会
4.1	浪江小学校 在校生 9 名、津島小学校 在校生 2 名 (4月1日現在)
10.24	「ふるさとなみえ科」の実践が時事通信社教育奨励賞努力賞を受賞
10.28	浪江町は帰還困難区域を除く避難区域解除後の学校再開に向けた検討委員会を設置
2017. 2. 1	浪江小学校 在校生 6 名、津島小学校 在校生 2 名

震災・原発事故後の浪江町の小学校の状況 (児童数の推移)

学校名	H22年5月 震災前	H23年8月末 震災直後		H28年10月1日現在	
浪江小	558	30	30 (3%)	7	9 (1%)
津島小	58	0		2	
幾世橋小	122	0		臨時休業	
請戸小	93	0		臨時休業	
大堀小	157	0		臨時休業	
荻野小	174	0		臨時休業	

※ H28.5.1 現在 浪江町に住所を有する児童 県内避難 517名 県内避難 316名

2 教育目標・学校経営の方針について

(1) 教育目標 (平成25年度から)

- ・なみえを愛し 故郷への誇り、絆、地域づくり
- ・みらいに向かって 学力、想像・創造、自己実現
- ・えがおで生きる 安心、感動、共同・協同、環境
子ども

(2) 学校経営の方針 (平成28年度)

小さな学校で 大きな感動を

- 感動と笑顔があふれる学校づくり
- 自己実現を図る、一人一人が主役の学校づくり
- 家庭や地域、ふるさととの絆を深める学校づくり
- 安全・安心で信頼される学校づくり
- 新たな役割と期待に応える学校づくり

(3) めざす教師像

- 子どもとともに感動し、教育愛豊かな教師
- 指導力・専門性に優れた教師
- 協働し、研鑽に励む教師
- 変化に対応できる教師集団



(4) 平成28年度 指導の重点

『なりたい自分に向かって 生き生きと学ぶ子ども』

3 「ふるさとなみえ科」について

ふるさとを追われた子どもたちに、ふるさとの自然豊かな風景や伝統文化を残すために、平成24年度から、郷土を学ぶ学習を教育の柱とし、「ふるさとなみえ科」に取り組んできた。

「ふるさとなみえ科」は、総合的な学習の時間や各教科との関連を意識した横断的・総合的な学習や探究的な学習を通して、浪江町の伝統文化を学び、浪江町の方と触れ合う機会や体験的な学習を多く取り入れ、年間70～90時間取り組んでいる。

ふるさとを追われた浪江町の子どもたちにとっては、新しい環境の中で生きていることを自覚することが求められている。今まで学校、家庭、地域の人々に見守られていた子ども

ちであったが、新たな環境下では、学校が中心となって地域をつなぐことが必要という考えに立ち、教育の場において、持続可能な将来を実現できるような行動の変革をもたらすことが大切であると考えている。

東日本大震災以降、子どもたちがこのまま浪江の地から離れ続けたとき、自然豊かな浪江町の美しい風景や伝統工芸である大堀相馬焼などが、どのくらい子どもたちの心の中に残っていくのだろうかと考え、今後の浪江小学校の在り方が浪江町の復興と大いに関わっていくと思われる。そこで、「ふるさとなみえ科」を創設し、地域の素材や人材を活用して郷土を愛する心を育み、未来を創造的に生き抜くたくましい人間を育成するため、次の目的を掲げた。

【その1】子ども一人一人に、(こころの)ふるさとへの太い根を張らせる。家庭・学校が大好きで仲良く生活し、自尊感情が豊かで生きるエネルギーにあふれた子どもや、地域の自然・伝統・文化にどっぷりつかり、好ましい原風景を持っている子どもの育成に努めていく。

【その2】郷土の良さを守り引き継ぐ人々やふるさとのために活躍する人々の生き方に学び、子ども自身にも「志」を持たせる。単なる夢ではなく、どんなアスリートになりたいか、仕事を通してどんなことをしたいのか、どんな人間になりたいのか、「どんな」を考えさせることによって、子どもが取り組むべき課題を明確にさせていく。

東日本大震災、原発事故以降、学校と地域が引き離されてしまった今、地域に変わり、避難先の学校が、地域文化を経験させる役割を担うことになった。しかし、避難先でも、追われた地域の文化や伝統を維持しようと努力する人々がおり、地域を離れても地域を創るという基盤は残されている。本校では、子どもたちが集まる場所すべてが学校、子どもと関わる人すべてが先生と考え、「学校の中に街がある」との基本構想のもと、ふるさと学習を進めてきた。

「ふるさとなみえ科」は、総合的な学習の時間を中心に、子どもたちが地域の伝統文化に触れたり、地域の人々と交流したりすることを中心に次の4つの柱を大切にしてきた。

○ ふるさとの良さを発見する

町に関する文化や地域興しの方策などについて調べ、「なみえ子ども新聞」にまとめ、それを町の方に配布したり、表現活動の一環として子どもたちのふるさとへの思いを「なみえカルタ」に表したことが、改めてふるさとの風情や暮らしの良さを発見する機会となった。

○ ふるさとの伝統文化を学ぶ

伝統工芸品である大堀相馬焼の歴史や特徴を学び、カップや皿、湯飲み茶碗などを制作した。伝統文化を体験するだけではなく、ふるさとを離れても伝統文化を維持しようとする人の心意気に触れることができた。学校での地域の伝統文化の学習は、その担い手に対して、自分の活動が評価され、生きがいを感じるという素直な喜びをもたらした。



【大堀相馬焼体験】

○ ふるさとの人々と交流する

避難先にある仮設住宅を訪問して、子どもたちが作成した「なみえカルタ」や昔遊びで浪江町の人々と交流した。懐かしい名称が登場するカルタをとおして、不自由な避難生活をする町民に笑顔が戻った。また、子どもたちがプランターに花を育て、春と秋の2回仮設住宅にプレゼントをし、ふるさとの人々と交流を深めた。



【仮設住宅での交流会】

○ ふるさとの未来を考える

町の職員から浪江町復興計画の説明を聞き、帰還後についての議論が盛り上がり、「未来のふるさとなみえ」学習会にまで発展した。ワークショップ方式で福祉、産業、商業、施設や復旧・復興に関して子どもたちが議論し、子どもたちによって「30年後の浪江町」の姿を創り上げ、大学の建築科の学生の協力を得て、立体模型で再現し、町民に披露した。



ふるさとなみえ科は、教科等の枠を超え、探究的、協同的な学習の場となっている。また、教師が教材開発をし、【30年後の浪江町模型作り】新しいカリキュラムを作成していく面白さも併せ持ち、地域が現在の状況にありながらも、人々が学校と連携し、子どもたちを育てていく教育が可能となった。

4 「ふるさと創造学」について

(1) 福島県双葉郡教育復興ビジョン

学校・家庭・地域の連携の必要性を確認した上で、三者の連携を回復するため、福島県双葉郡教育復興ビジョン推進協議会により、福島県双葉郡教育復興ビジョンが生まれた。福島県双葉郡教育復興ビジョンとは、「双葉郡のこれからの教育のあり方」について双葉郡の抱える課題の解決につなげるとともに、魅力的で特色があり、世界に誇れる教育復興をすすめるビジョンのことである。

福島県双葉郡教育復興ビジョンは、以下の5つの基本方針のもと進められている。

- ① 震災・原発事故からの教訓を生かした、双葉郡ならではの魅力的な教育を推進する。
- ② 双葉郡の復興や、持続可能な地域づくりに貢献できる「強さ」を持った人材の育成。
- ③ 全国に避難している子どもたちも双葉郡の子であるという考えのもと、教育を中心として双葉郡の絆を強化する。
- ④ 子どもたちの実践的な学びが地域の活性化にもつながる、教育と地域復興の相乗効果を生み出す。
- ⑤ 双葉郡から新しい教育を創り出し、県内・全国へ波及させる。

こうした5つの基本方針のもと、福島県双葉郡教育復興ビジョンの実現に向け、幼稚園・保育園から大学まで、各学校段階を通じて一貫した価値観の教育目標とカリキュラムによる教育を行う。長期的に双葉郡の復興を担うことに加えて、全国や世界に貢献できる人材を育成すること、課題解決型学習(アクティブラーニング)や海外留学を導入し、主体的に学ぶ力や思考力・実践力等を育むことを目指している。また、復興の担い手の育成に向けた中高一貫校の設置や、避難している子どもたちの受け皿となる幼稚園や小学校の整備などが進められている。

(2) 「ふるさと創造学」

こうしたビジョンの基幹をなす取り組みの一つに、「ふるさと創造学」がある。「ふるさと創造学」とは、双葉郡内の学校が独自に行う、自分たちの故郷の魅力を知り、今故郷が抱えている課題をどのように解決していくかを考え、復興に向けて発信するための授業である。平成24年度春から、「総合的な学習の時間」の授業の中で、双葉郡8町村の学校で独自に取り組んでいる。「ふるさと創造学」の授業では、「ふるさとの伝統文化を学ぶ、地域の大人・企業の人々・外国人などから話を聞く、地域のことを調べて発信する、復興に向けた提言を行う」など、教室の中だけにとどまらない行動型・体験型の学習を各校で趣向をこらし行っている。



ふるさと創造学の目的は、自分に関わる力(主) 【今年度のふるさと創造学サミット】

体性)、他者と関わる力(協働性)、社会に関わる力(創造性)を育てることである。その過程において、小学校では【ふたばで (in)】自然や文化体験、食育などを通して地域に浸ること、中学校では【ふたばについて (about)】地域を知る・伝えること、高校では【ふたばとともに (with)】自分の未来・夢をつなぐことを目標としている。

平成26年12月20日には、郡山市のビッグパレットふくしまで、「第1回ふるさと創造学サミット」が開催され、3年目の今年度も双葉郡8町村の小中高校が集りまして学習成果を発表し合った。

【ふるさと創造学の学びを通じて伸ばす力～平成28年2月】

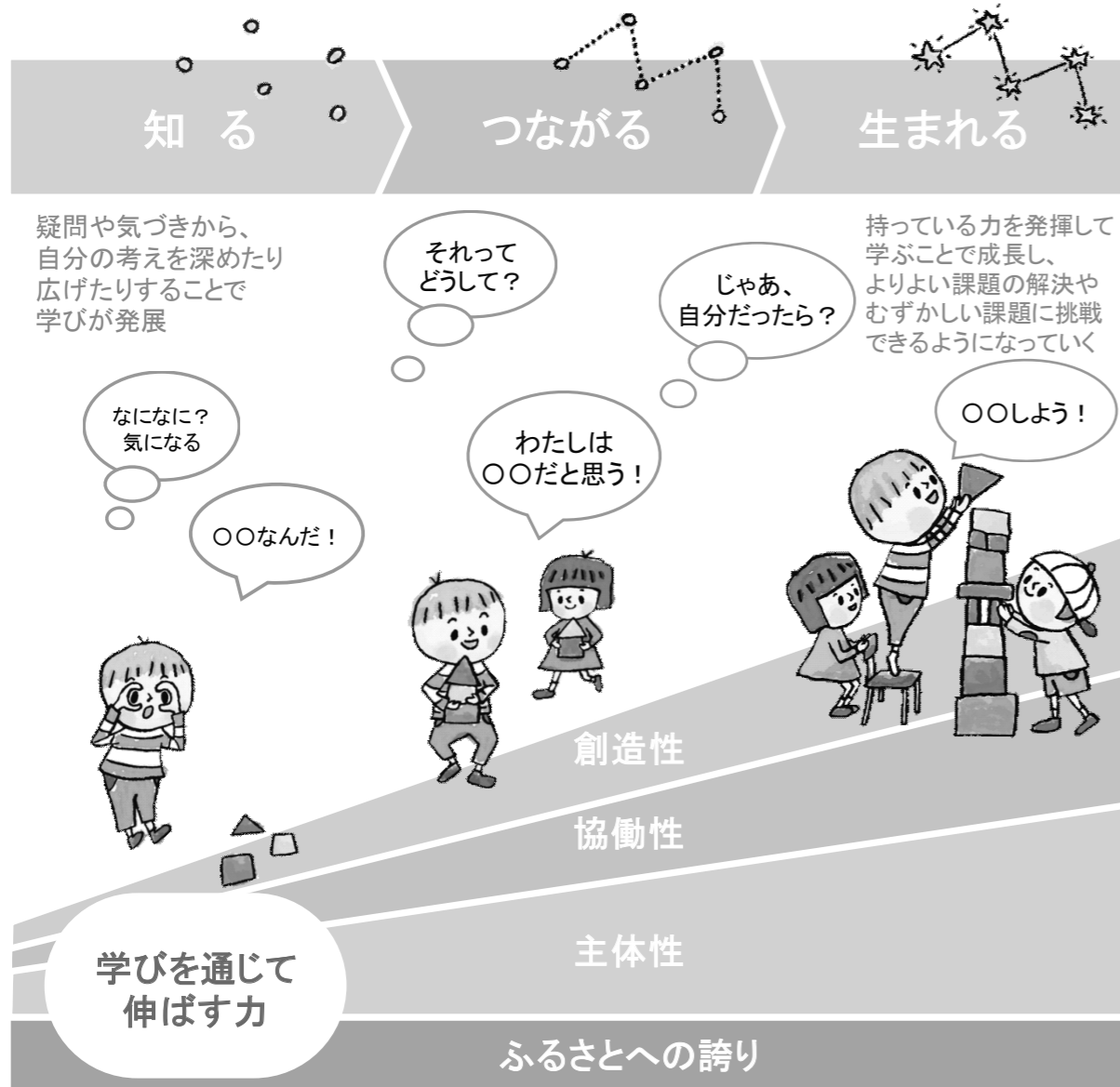
◆双葉郡教育復興ビジョン (平成25年7月31日策定)

子どもたちの“自ら未来を切り拓く力”を育むため、各町村の学校ではそれぞれの個性を生かしつつ町村や世代の垣根をこえてつながり、双葉郡独自の魅力的な教育を進めています。

◆8町村で取り組む「ふるさと創造学」

ふるさと創造学は、自分の未来を自分で切り拓いていくための学びです。双葉郡教育復興ビジョンの柱の一つである双葉郡独自の魅力的な教育の実践として、2014年度よりスタートしました。変化するこれからの社会に役立つ学びのスタイルを身に付けます。

<ねらい> 主体性・協働性・創造性を伸ばし、自ら未来を切り拓く力を育む



5 より魅力ある「ふるさとなみえ科」をめざして

本校のように東日本大震災と原子力発電所事故による長期の避難、新たな場所での学校再開・学校運営という例は、過去に例を見ない。教育の土台である地域と学校が引き離され、学習の機会を失いかけていた子どもたちを前に、教職員が創り上げたのが「ふるさとなみえ科」である。ふるさと喪失という先の見えない問題に直面し、喫緊の課題として、子どもたちに「ふるさとへの誇りをもち、自ら課題を追究し、生き抜く力を育てたい。」の思いが結実したのが「ふるさとなみえ科」であり、学校教育の柱となっている。

平成24年度にスタートした「ふるさとなみえ科」は、教職員の話し合いをもとに、主に総合的な学習の時間を中心に、体験学習や探究的な学習を組織し、ふるさとの伝統行事を題材にした新聞づくりや仮設住宅訪問などに取り組んだ。さらに、教職員によって実践した学習に評価が加えられ、ふるさとの人々とのつながりを大切にした学習へと発展している。その結果、子どもたちは、ふるさとの価値を再認識するとともに、今後のふるさとへの思いを抱くようになり、成果を上げることができた。

一方、「ふるさとなみえ科」を先行事例とし、本校と同様な避難状況にある双葉郡全域でのより広域的な取り組みとして平成26年度から「ふるさと創造学」がスタートした。双葉郡の小中高12年間の教育課程に位置付けられる新たな取り組みについては、この時間に育てられる資質・能力やアクティブラーニングについての理解が不可欠で、年々減少する児童数やふるさとでの経験が希薄になる子どもに対する探究的な学習の充実を図る。具体的には、課題設定や整理・分析の充実、体験や共同的な学習、言語活動の充実といった授業に関する課題など、今後も工夫し実践すべきことが焦点化された。

本校では、「ふるさと創造学」との関係を整理する中で、引き続き「ふるさとなみえ科」を学校教育の中心に据えた実践を行うために、より魅力ある総合的な学習の時間をめざす必要があると考えた。また、地域と学校のおかれている特異な状況下で、学校再開先の二本松も「ふるさとなみえ科」の学びの対象とし、ふるさとへの思いを深めていくようにすることとした。2つのふるさととの関わりの中で自己の在り方や生き方を見つけさせることもねらいとして実践を積み重ねてきた。

II 「ふるさとなみえ科」5年間の実践経過

1 「ふるさとなみえ科」創設と「ふるさと創造学」への先行的な実践期 H24・H25

「ふるさとなみえ科」の創設について

H24. 4. 1

教室訪問をした際、掲示されていた児童の作品に思わず微笑んでしまった。「楽しみはみんなで行った交流ツアー なみえ焼きそば食べてるとき」浪江町の青年がB級グルメ大会で全国的に広めた「浪江焼きそば」であるが、思い出だけでも濃いソースの香りが漂ってくる。

平成24年2月、浪江町復興に関する町民アンケートの集計結果が公表された。「浪江町に戻りたいか」の問いに、「条件さえ整えば浪江に戻る」が64.1%。「浪江に戻らない」が32.9%であった。ただ、子育て世代の20～39歳に限れば、半数が「浪江には戻らない」と回答しており、「他の町民がある程度戻れば戻る」という意見も多く、それを含めると9割以上が「今すぐには浪江に戻れない」と考えている。子どもたちがこのまま浪江の地から離れ続けたとき、ソースの香りではしか浪江を思い出せなくなりはいないか。自然豊かな浪江町の美しい風景や伝統工芸である大堀相馬焼などが、どのくらい子どもたちの心の中に残っていくのだろうかと考えるとき、これからの浪江小学校のありようそのものが、浪江町の復興と大いに関わっていくものと思われる。

そこで、今年度から、地域の素材や人材を活用し郷土のよさを伝えるために「ふるさとなみえ科」を創設し、郷土を愛する心を育み、未来を創造的に生き抜くたくましい人間の育成を目指したい。

1 郷土のよさを引き継ぐ人々やふるさとのために活躍する人々の生き方に学び、子ども自身にも「志」を持たせる。

単なる夢ではなく、どんなアスリートになりたいか、仕事を通してどんなことをしたいのか、どんな人間になりたいのか、「どんな」を考えさせることによって、子どもが取り組むべき課題を明確にさせていく。

2 子ども一人一人に、しっかりと（こころの）ふるさとへ太い根を張らせる。

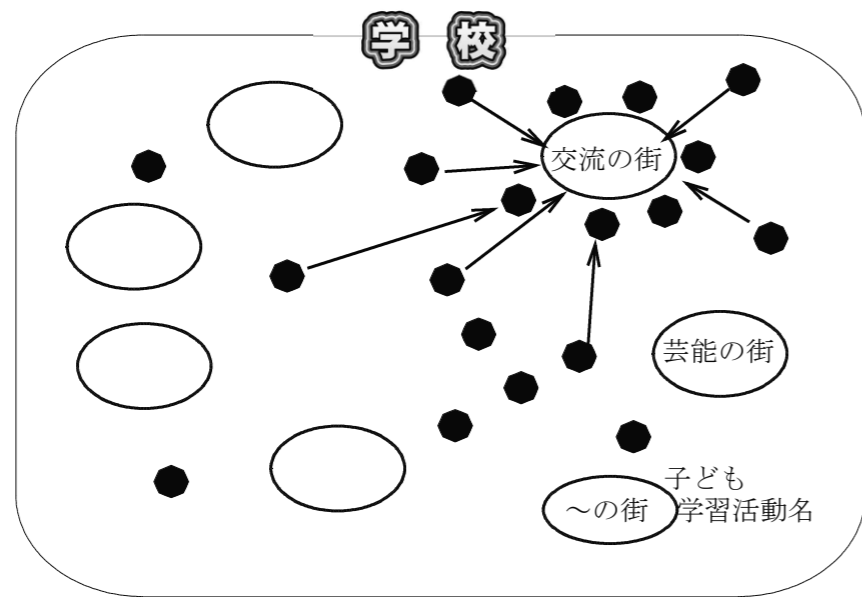
家庭・学校が大好きで、仲良く生活し自尊心が豊かで、生きるエネルギーにあふれた子どもや、地域の自然・伝統・文化にどっぷりつかり、好ましい原風景を持っている子どもの育成に努めていく。

(1) 「ふるさとなみえ科」の基本構想

地域の素材や人材を活用してふるさとのよさを伝えることで、「ふるさとを愛する心を育み、未来を創造的に生き抜くたくましさ」を身に付けてほしい。」と願って「ふるさとなみえ科」は創設された。ただし、避難先で開校している場合、地域と学校の関係は通常とは大きく異なる。出かける地域を失った中での学習は、学校の中に地域を仮定し、学校にふるさとの人材を招き、子どもたちにふるさとのよさを伝えてもらうことにした。

1年間の実践が後に整理され、学校の中に「交流の街」、「陶芸の街」、「情報の街」、「芸能の街」、「知の街」を再現し実践を積み重ね、後に学校が核となって地域をつなぐ「ハブスクール」構想に発展する。

「学校の中に街がある」イメージ図（平成25年4月）

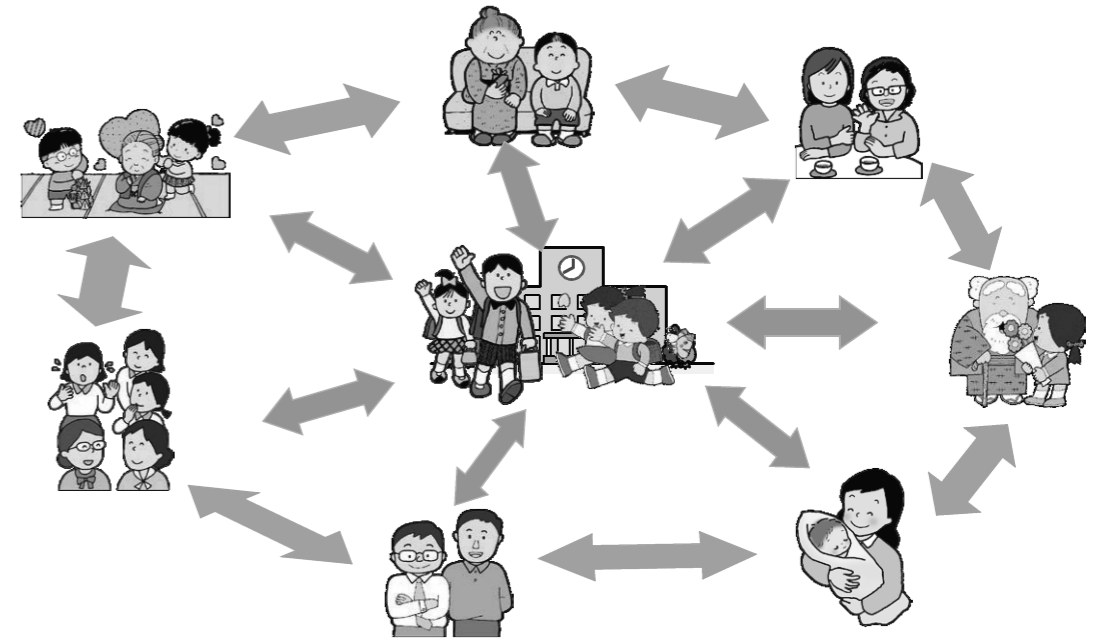


<街の例>

交流の街	仮設訪問（昨年度同様）	町民運動会（新）
陶芸の街	大堀相馬焼体験（昨年度同様）	
情報の街	なみえ子ども新聞（新）	
芸能の街	太鼓 十日市（新）	
知の街	地域の人のお話（昨年度同様）	
ボランティアの街	プランター（花）配付（昨年度同様）	

「ハブスクール構想」イメージ図

※浪江町の仮設住宅に住んでいる方々を訪問したり、学校に浪江の方々を集めたりして、浪江の方々とふれあい、自分のこれからの生き方につなげる。



(2) 2年間の実践経過

年度	実践・研修	
平成24年度 (1年次)	5月	なみえ町新聞づくり
	6/21	仮設住宅に花を贈ろう
	6月	なみえカルタづくり
	7/9	仮設住宅訪問
	9/6	未来の浪江町構想
	9/13・14	大堀相馬焼体験
	18・19	〃
	9/20	みんなのふるさとなみえ交流会
	11/2	大堀相馬焼絵付け体験
	11/23	十日市祭ステージ発表
	2/7	未来のふるさと浪江を考えよう発表会
	2/12・13	浪江町の未来を考えよう
	2/26・27	仮設住宅訪問
	2/27	浪江昔話紙芝居
平成25年度 (2年次)	6/5	なみえ町新聞づくり PART 1：取材の仕方
	6/8	PART 2：新聞記事の書き方
	6/10	PART 3：浪江町について調べたよミニ発表会
	6/25	仮設住宅に花を贈ろう
	7/5・8/22	PART 4：なみえ焼麺新聞づくり
	10/8	〃
	2/6	PART 5：十日市祭新聞づくり

(3) 主な実践例

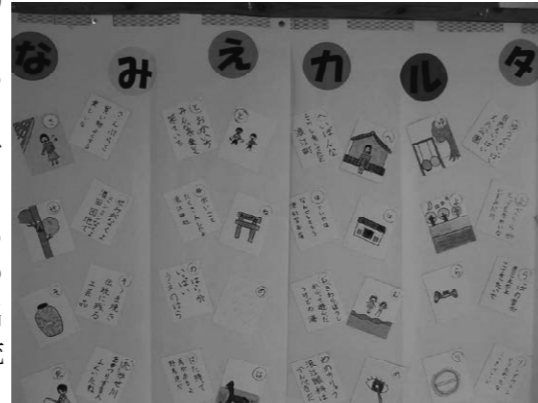
【平成24年度～1年目の実践から】

① 仮設住宅へ花を贈ろう

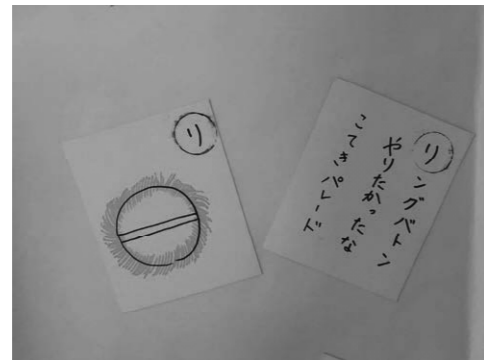
初年度に行った活動は震災後間もない時期であったため、二本松市内の仮設住宅に子ども達が育てた花をプレゼントする活動を行った。プランターの側面には、「えがおいっぱい」「いつも元気でいてね」「笑顔をわすれずに」「これからもみんなで協力しましょう」等の言葉が添えられている。その後、この活動は交流の一環として現在も継続している。

② なみえカルタ

6年生が作った「なみえカルタ」が総合的な学習の時間の中で言語活動の一環として、重要な学習となっていく。当時の子どもたちは、ふるさとを思う気持ちをカルタにしたが、浪江を想うなつかしい気持ち、帰りたいけど帰れない複雑な気持ちもカルタに表れている。浪江町での生活経験を有している子どもたちであったために作られたカルタにもその子の感じた浪江町が描かれリアリティがある。出来上がったカルタで仮設住宅の皆さんと交流をすることも現在に引き継がれている。



【初年度のカルタの展示】



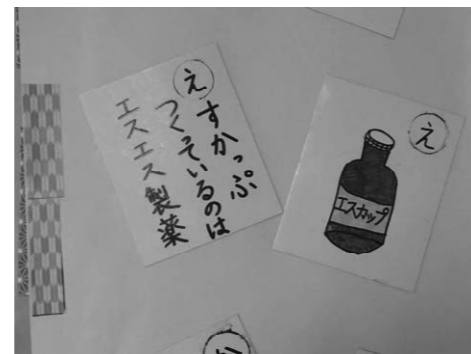
左：「リングバトン やりたかったな こてきパレード」

右：浪江町で行われていた鼓笛パレード



<初年度につくられたなみえカルタの中から>

- 「あーおいしい 浪江やきそば 名物だ」
- 「とおかいち 毎年たのしみに していいよ」
- 「えすかつぶ つくっているのは エスエス製薬」
- 「ねがいごと たくさんしたよ 浪江神社」
- 「へいぼんな 暮らしをしてたよ 浪江町」
- 「遊具がいっぱい 自然もいっぱい 丈六公園」
- 「サンプラザ 買い物よくする 楽しいな」
- 「麦わら帽子 かぶって遊んだ うけどの海」



③ 「未来のふるさとを考えよう」～未来につなぐ復興の思い～

9月に6年生が浪江町役場復興推進課の小林直樹さんを講師に迎え、「未来の浪江町構想の授業」を実施した。

「未来につなぐ復興への思い」をテーマに小林さんからは、「共に乗り越える」「一人一人の暮らしの再生」「子どもたちの未来につなぐ」という三つの柱についての話を聞いた。

子どもたちからは「放射線のゴミはどこに捨てるの?」「いつ頃浪江に帰れるの?」と質問があり、事前に考えた将来の浪江町について発表した。



<感想から>

- ・みんなでともに乗り越えることを話してくださった。「町単独でなく、我が国全体で災害に向き合う」という話に感動しました。(Mさん)
- ・江戸時代の飢饉の時、浪江町の半分以上の人が亡くなったのに、半分の人が知恵と努力によって、命とふるさとを受け継いで来たこと知って、びっくりしました。(Aさん)
- ・浪江に帰りたい人、帰たくない人がいろいろいることを知りました。僕は浪江に帰れるように応援しています。(Dくん)

④ 「未来のふるさとを考えよう」発表会

早稲田大学の建築・土木の教員や学生の協力のもと、ワークショップ形式で、「30年後の浪江町でどんな生活ができるか」を考える学習を行った。

前半は模造紙に「海側から山側までどんな環境の中で暮らしたいか。」「どんな施設があったらいいか。」など、自由に絵を描いた。

後半は、前日に描いた町の様子を紙粘土や色画用紙などで、立体に表した。子どもたちは、学生に立体を作る方法を教えてもらい、未来の浪江町を夢見ながら、楽しく組み組み模型に表した。なみえタワー、なみえ空港、文化センター、放送局 (NTV)、マーケットエリア、牧場……子どもたちの想像は大きく膨らんでいった。

<単元名 未来のふるさと なみえを考えよう>



- ねらい
浪江町の未来を考えるを通して、離れていてもふるさとを大切に思う気持ちを育む機会をつくる。
- 活動内容

問題提起	1 浪江町役場職員から浪江町の復興についての話を聞く。 2 3年生が「未来のふるさと なみえ」について考えたことを発表する。	9月
------	---	----

広める	1 各学年で「未来のふるさとなみえ」について、話し合う。 ※生活科や総合学習 2 各学年やブロックで話し合ったことを家庭科室前の掲示板に貼る。(発表する)	10～11月
まとめる	3 全学年の考えをもとにいくつかのテーマを決める。 ※例 農業について 公共施設について 医療について 環境について 福祉について	12月～
深める	4 テーマをもとにグループにわかれ、内容をより具体的に考えていく。(6年生を中心に全校生で) ↓ 決まったことは立体パネルに貼る	
完成	5 子どもたちの考えをもとに、学生も一緒に未来の浪江町について考え、決まったことを立体模型に表す。 ↓ 「未来のふるさとなみえ」の立体模型図【完成】 ※早稲田大学の学生が児童の思いをパネルに表現して完成	2月
外に広げる	6 発表 ①保護者に発表(2/28) ②町関係者に発表(3月)	2月下旬～ 3月上旬

【平成25年度～2年目の実践から】

① 「取材」「新聞記事の書き方」の授業



「ふるさとなみえ科」で作るふるさとなみえ新聞は、浪江町のことを資料集やインターネットで調べてまとめるだけではなく、子どもたちが調べたい文化や産業等に関わっている方を学校にお呼びして話を聞いたり、子どもたちが出向いて取材をする。子どもたちの目線から前向きに生きようと努力する方々の考えを新聞にまとめた。

<取材の仕方>

6月5日、NHKの取材記者、佐藤真莉子さんから「取材の仕方」についての授業を実施した。佐藤さんがいつも持ち歩いているカバンには、地図、パソコン、ビデオカメラ、マイク、ICレコーダー等が入っていた。取材の時に注意することは、自分のことを知らせる。声の大きさを考える。目線を合わせる。笑顔で話しかける。相手に分かる言葉遣い

をする。話をつなげること等、取材のポイントを分かりやすく教えて頂いた。

<新聞記事の書き方>

6月18日、読売新聞の記者、傍田光路さんから「新聞記事の書き方」についての授業を実施した。いつ、誰が、どこで、何をしたかを書いただけではおもしろい記事にならない。その場にはいないと書けない様子を記事の中に盛り込んだり、いつも「なぜ？」と問いかけてみて、気持ちを大切に記事を書くことを心がけている。傍田さんが以前に書いた記事に「見出し」をつける指導や、写真の選び方とおして、新聞の書き方を真剣に学習していた。



② 「浪江焼麺太国」の授業



町おこし団体「浪江焼麺太国」の方に、浪江焼麺の歴史や特徴、そして震災後も続けている熱い想いを聞く授業を実施した。目の前で作られる浪江焼麺の様子に驚き、試食した感想も含め新聞にまとめた。

③ 「標葉せんだん太鼓」の授業



十日市祭に向けて約2ヶ月間、標葉せんだん太鼓の横山会長さんの指導を受け、和太鼓の練習を続けてきた。十日市祭に集まった多くの浪江町の皆さんへ元気を届けることができた。

和太鼓演奏は少人数での演奏形態も可能で、十日市祭をはじめ、運動会や来校する皆さんを前に披露する機会も多い。

2 より探究的な学習へ深化する「ふるさとなみえ科」の実践期 H26～H28

(1) 重点的に取り組んだ事項

- 育成すべき資質・能力を明確に「ふるさと創造学」との整合性を図った教育課程の工夫
学校の教育目標の具現化と双葉郡教育復興ビジョン・ふるさと創造学との関係を整理し、育成すべき資質・能力を明確に、より実態にあった教育課程、指導計画を作成する。
- 魅力ある「ふるさとなみえ科」のための学習指導過程の工夫
学習過程において、課題解決のために避難元、避難先に関わらず、自他の地域の「ひと、もの、こと」を生かし、探究的な学習過程の「課題設定」と「整理分析」を充実させた単元指導計画を工夫する。
- 学習環境整備による「ふるさとなみえ科」の学習過程の可視化、発表力の充実
校舎内を「まるごとふるさとなみえ博物館」ととらえ、常時、「ふるさとなみえ科」の学習状況が見渡せるような学習環境づくりを進め、全校児童の学習の成果が共有できるよう発表・展示を工夫する。

(2) 3年間の実践経過

年度	実践・研修
平成26年度 (3年次)	4月 「ふるさと創造学」スタート 5月 双葉郡教育復興ビジョン推進協議会視察 「ふるさとなみえ科」授業公開 9/18 「ふるさと創造学」中間発表会 「ふるさと創造学」教員研修会 田村 学：文部科学省視学官 12/20 第1回「ふるさと創造学サミット」 12月 ～3月 評価・反省、教育課程編成 1/23 子ども未来会議 教員研修会伝達
平成27年度 (4年次)	5/1 「ふるさと創造学」教員研修会伝達 カリキュラム検討研修会 日渡 円：兵庫教育大学教授 5/28 「ふるさと創造学」教員研修会伝達 子どもが探究的に学ぶ「総合的な学習の時間」の単元計画 田村 学：文部科学省視学官 8月 まるごころふるさとなみえ博物館計画作成 9月 なみえっ子カルタ制作 ～12月 絵本作家：飯野和好先生の指導(10/7、13) 12/12 第2回「ふるさと創造学サミット」 12/22 なみえっ子カルタ町長さんへの贈呈式 12月 実践評価・反省、教育課程編成 ～3月 2/27 浪江と多摩を結ぶ和太鼓コンサートに出演 東京都多摩市の桜ヶ丘商店街の招待による多摩市立瓜生小学校との交流 3/10 県立博物館学芸員の指導によるなみえっ子カルタ展示
平成28年度 (5年次)	4/21 「ふるさと創造学」教員研修会 探究的な学習のプロセスの充実と発展 田村 学：文部科学省視学官

7/12	まるごとふるさとなみえ博物館看板製作
8/31	県立博物館学芸員の指導
11月	なみえっ子8人の2学期 映像作品撮影
～12月	県立博物館
11月	「んだげんちよ」ダンスレッスン OTEダンススクール講師指導
12/3	第3回「ふるさと創造学」サミット
12月	～3月 実践評価・反省、教育課程編成
2/21	ふるさとなみえ科5年間の歩み公開授業

(3) 主な実践例

- ① 「ふるさと創造学」との整合性を図り、地域や学校の実態に即した教育課程の工夫
学校の教育目標の具現化と双葉郡教育復興ビジョン・ふるさと創造学との関係を整理し、育成すべき資質・能力を明確に、教育課程、指導計画へ位置付ける。
東日本大震災と福島第一原子力発電所の事故による経験を乗り越え、社会で活躍できる人材を育成し、双葉郡の新しい未来を創ることが教育の使命であるとの考えのもと、平成25年7月に「双葉郡教育復興ビジョン」が取りまとめられた。
また、ビジョンの柱として、自分たちのふるさとの魅力を知り、今ふるさとが抱えている課題をどう解決していくかを考え、復興に向けて発信するための授業を平成26年度から総合的な学習の時間の授業の中で双葉郡8町村の学校で「ふるさと創造学」に取り組んでいる。
本校では、ビジョンの趣旨と教育目標との整合性を図る一覧や「ふるさと創造学」の取組指針を自校化し可視化することで、校内で共有し教育活動に生かしている。

教育目標	教育目標		
	なみえを愛し	みらいに向かって	えがおで生きる
教育理念 双葉郡ならではの魅力的な教育の推進による、復興や持続可能な地域づくりに貢献できる人材の育成 ・子どもたちの主体的な学びで地域を活性化し、教育と地域復興の相乗効果を生み出す ・教育を中心とした双葉郡の絆の強化			
教育目標 創造力と想像力、この2つの方で子供たちの夢と人間力を育て、地域の復興に主体的・協働的に関わる人材を育成する。 ①人間(心と命)を尊重し、各々の個性や能力の伸長を目指す教育の推進 ②課題解決力・応用力・実践力を重視する未来志向の教育の推進			
基礎となる資質・能力 1. 困難な事象に対して、自らの考えを持ち積極的に取り組む姿勢 2. 様々な体験から主体的に学び続け、実生活に生かす姿勢 3. 自信をもって目的達成に向けて努力する力 4. これからの情報社会に対応した、知識・情報や、ICT(情報通信技術)を活用する力 5. 周囲との関わりの中で自らの役割や生きる意味を考え、自らの人生を組み立てられる力	◎防災訓練をいかに 地域の復興 ◎よりよい世界の実現 ◎アクティブラーニング ◎自覚性 ◎ICT活用	◎活用力・課題解決力・実践力 ◎個性や能力 ◎協働・情報モラル	
双葉郡で特に育むべき資質・能力 1. 経験や学びを通して将来の希望や夢を見出し、その実現に自らを近づける力 2. 価値観の違いを乗り越えて周囲とともに活動し、喜びを分かち合いながら他者と協働し、各人が力を発揮する協働性 3. ふるさとに生まれた誇りを持ち、文化や伝統を大切に作る姿勢 4. 放射線の影響等に関する知識とそれを実生活に生かす力(リスクマネジメント力/危機対応能力) 5. 被災の経験を次世代や国内外に伝える表現力、発信力	◎地域の方と関わる ◎未来を創造する力	◎主体的な学び ◎協働・協働	◎多様な主体と連携 ◎ふるさとの誇り ◎未来につなげる学習 ◎危機管理能力 ◎表現力・発信力
困難な課題に挑戦し、未来を創る力を育成する教育課程の実践 異なる知識の集積ではない「課題解決型」の教育を実施。 具体的には、地域の課題や復興について学び、その学びを地域の課題の解決や復興に生かす実践的な学び(アクティブラーニング)を積極的に実施。 生徒の自覚性を重視し、子供たちに場を与え、子供たち自身の主体的な活動を引き出す教育を実施。 一人一人がもてあそばせ、自分の「強み」を実感できるように生き生きと活動する場や、体験的・探究的な学習を行う機会を多く設ける。 ・ 少人数指導の充実(ブロックでの交流学習、壁に貼った「めあて」のもと、個の伸びに重点を当てた学習) 地域課題を学校教育と関連付ける仕組みを構築。 学校と地域の絆を深め「学校の中心に町がある」という考えのもと、子どもが集まる場所すべてが学校・子どもに関わる人すべてが学校と考える、地域と学校のつながりを築いていく。実際には、学校を核(コア)とした地域コミュニティとの連携を一層充実させた学習をすすめる。 ・ 役割、地域の福祉施設、再開した事業所、仮設住宅住民、二本松市や下川崎地区との連携 地域という地に足の着いた視点と、全国、海外という広い視点の双方を育成。 (例)ふるさと科の創設(双葉郡の歴史・伝統等の学習を基に未来につなげる学習)、海外留学制度の導入(知見を広げ、双葉郡から世界への発信を目指す学習) 震災・原発事故の影響を客観的に把握し、未来の双葉郡を創造する力を育成するカリキュラムの策定。(例)演劇ワークショップ、ジャーナルの作成・情報発信、社会参加とボランティア活動、地域文化の継承と保存等の取組等 震災・原発事故の経験から得た双葉郡ならではの学びの要素を、各教科等の学習内容に取り込む。 復興支援に携わる様々な人との交流経験を生かし、多様な主体と連携した学校づくりと教育を推進。 双葉郡の人にとって魅力的な、特色ある学校作りをすることで、双葉郡の子供を集めるとともに、その他の地域の子どもたちとも一緒に学び合う環境を整備し、相乗効果を生み出す仕組みを構築。 体験活動や避難生活の中で感じた「ふるさとの思い」やよりよい社会の実現の貢献したいという気持ちを具体的な学びにつなげ、地域の伝統・文化・自然を誇りたり源江町の復興に向けた取組に離れながら、たずさわる人々の思いや考えを学習する。 ・ ふるさとなみえ科(地域の課題を学ぶ、仮設住宅訪問による地域住民との交流) 道徳・防災教育、放射線教育と各教科の学習との関連を図り、安全に生活するための知識を学び、自ら考え判断し行動できるような活動を工夫する。 ・ 道徳の時間 ・ 学校安全計画 ・ 防災教育(自ら考え、判断し、行動できる力) ・ 放射線教育 体験活動・交流活動を実施した学習を推進し、行政や地域おこし団体、地域の行事など地域コミュニティとの連携を重視しながら、復興に向けてねばり強く取り組んでいる方(団体)と交流して考え方や生き方を学ぶ。 ・ ふるさとなみえ科(仮設住宅訪問・道江の伝統文化を体験し、受け継いでいる方と交流する) 少人数学習を構想するためにICTの活用を深めたり、交流学習や集合学習を進めたりするなど、ともに学ぶ機会を設け、他校とのつながりを強めたり、小中連携を推進する。 ・ ICT活用の積極的活用 ・ 近隣校との交流 ・ 小・中学校連携			

【探究的な学習を検討し、可視化した平成26年度版「ふるさとなみえ科」ダイジェスト】



② 全町避難中の地域や学校規模等の実態に合った指導計画の見直し

ア 対象とする「ふるさと」や学校とのつながりの見直し

避難前の「ふるさと」の対象は、各小学校の学区を単位に、より広域的な浪江町までであった。しかし、実際に避難後は、浪江町での生活ができない状況が続いていることや、低学年になるほど、浪江町での生活経験が少ないため、現在の学校再開地である二本松市も新たな地域として含めて学習を展開する必要性が出てきた。また、浪江町の人々も県内外に避難したり、避難先で再開している事業所等も散在しており、地理的な「ふるさと」以外にも、課題は多いため、その都度の見直しが必要である。

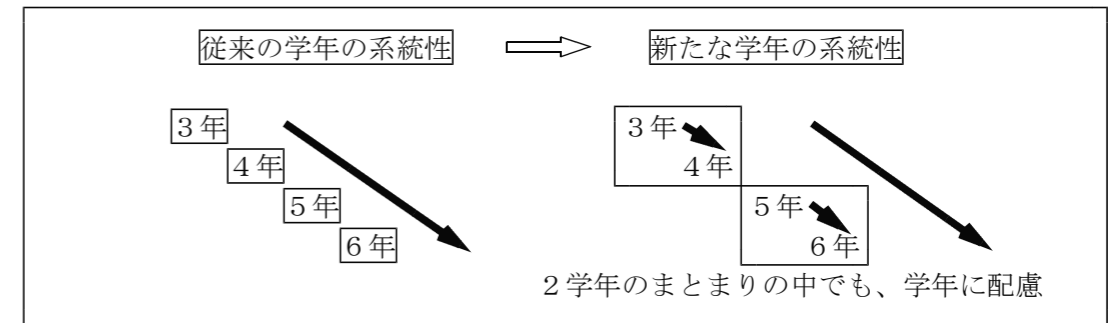
右の図は、「ふるさとなみえ科」において、学校が中心となって地域をつなぐことが必要というこれまでの「ハブスクール」の考えに立ったイメージ図である。



【学校が地域をつなぐイメージ図H26版】

イ 学年の系統性に関する見直し

従来は、各学年での学習を基本としながら同一の単元では、発達段階を考慮した学習を計画したが、学習内容の系統性にマンネリ化が見られたため、児童数の減少や発達段階ごとのまとまりを考慮し、2学年ごとのまとまりを単位としながら、学習過程の細部の段階では、学年ごと、児童ごとの学びが可能となるように学びのつながりを重視した。



(4) 魅力ある「ふるさとなみえ科」のための学習指導過程の工夫

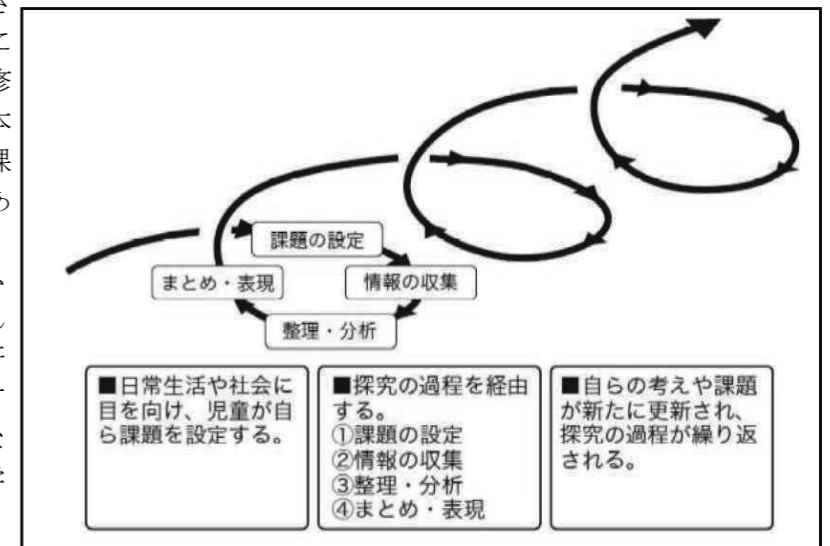
① 探究的な学習過程における「課題設定」と「整理分析」の充実

「探究的な学習」とは、小学校学習指導要領解説では、問題解決的な活動が発展的に繰り返されていく図1のような一連の学習活動のことである。児童は、「①日常生活や社会に目を向けたときに湧き上がってくる疑問や関心に基づいて、自ら課題を見付け、②そこにある具体的な問題について情報を収集し、③その情報を整理・分析したり、知識や技能に結び付けたり、考えを出し合ったりしながら問題の解決に取り組み、④明らかになった考えや意見などをまとめ・表現し、そこからまた新たな課題を見付け、さらなる問題の解決を始める」といった学習活動を発展的に繰り返していく」とある。

本校においては、児童自らが課題を設定し、主体的な学習へとつなげることが難しいことや年間指導計画や単元計画の中で、「整理・分析」の過程が設定されていないこと、探究的な学習の各過程においては、指導資料や指導事例集で紹介されている多様な学び方やものの考え方を促す思考ツールが、具体的に活用されていない実態が浮かびあがった。

このことは、「ふるさと創造学」教員研修会においても、重点的に研修している内容であり、本校だけでなく全国的な課題となっている内容である。

そこで、本校では「ふるさと創造学」で示された「取組指針」や教員研修会の内容を校内で共有しながら、現在の特異な状況における探究的な学習過程の特に、「課題設定」と「整理・分析」についての見直しを次のようにまとめた。



【図1 探究的な学習過程】

- ふるさとと学校をつなぐ、本物との出会いを大切にした人々との交流による課題設定の工夫により、子どもたちの課題解決に向かう探求心や挑戦心を刺激し、課題解決を自分のものとして意識できるようにする。
- 課題設定や整理・分析の場面で、思考ツールの活用による思考の可視化と協同による学びの充実を図る。

- ・ 思考ツールの特徴を理解する。
- ・ 効果を発揮する探究的な学習の過程への位置付けを見極める。
- ・ 思考ツールの難易度や特徴に合わせ、学年、個人の発達段階を考慮する。

② 実践事例 1 (平成27年度)

単元名 「ふるさとの伝統文化(食文化)」
～わたしの町の食自慢～浪江町かぼちゃまんじゅう～3・4年生 30時間

ア 単元の目標

ふるさと浪江には、地域ごとの自然や文化との関係により、特色ある食文化が存在した。現在も避難先で引き継がれている食文化に触れながら、子どもたちがふるさと浪江の「ひと・もの・こと」と関わり、つながることと併せて、避難先の二本松市の食文化と比較することで、主体的に探究的な学習活動を展開し、ふるさとの未来を拓く資質・能力を高めることができる。

2つの地域におけるふるさとの食を引き継ぐ人への調査活動や、体験を通して、協同で課題を追究し、新聞にまとめ発表することで表現力を高めることができる。

イ 単元指導計画・探究的な学習の過程

主な過程	学習内容・学習活動の流れ	<思考ツール>
課題設定	第一次 浪江の食の名物について、調べる課題をつくろう(1) 1 浪江町の生活を思い出したり、家族に聞いたことをもとに、浪江町の食の名物について話し合い、新たな課題をつくる。	①
情報収集	第二次 津島地区で作られていた「かぼちゃ饅頭」調査をしよう(14) 1 かぼちゃ饅頭について、知っていることや疑問に思っていることを出し合い、もっと調べたいことをメモに書き出す。 KJ法 2 メモをもとにウェビングで課題づくりをする。 3 かぼちゃ饅頭を作っている人をゲストに招き、かぼちゃ饅頭を実際に自分たちで作って、試食してみる。	① ② ③
整理分析 まとめ・ 表現	4 かぼちゃ饅頭について、発見したことや秘密について話し合う。 5 かぼちゃ饅頭について、分担して新聞をつくる。 6 「ふるさとなみえ科」発表会で、報告する。	② ④ ②
課題設定	第三次 「かぼちゃ」をスイーツに変身させよう(10) 1 ふるさとの食について、かぼちゃ饅頭以外のかぼちゃのスイーツを出し合い、もっと調べたいことをメモに書き出す。 KJ法 2 メモをもとにウェビングで課題づくりをする。 3 ふるさとの食について、二本松の和菓子屋を訪問し、伝統和菓子づくりを体験し、試食してみる。	① ② ③
整理分析 まとめ・ 表現	4 かぼちゃ饅頭以外のかぼちゃスイーツについて、作り方を調べ発表する。 5 かぼちゃを変身させるスイーツを考え、かぼちゃ饅頭を作っている人にイメージ図やレシピを届ける。	② ②
課題設定	第四次 「かぼちゃ」変身スイーツ新聞をつくろう(5) 1 かぼちゃスイーツ新聞をつくる。 まるごとふるさとなみえ博物館に展示する。 2 かぼちゃ饅頭の指導者や二本松の和菓子屋さんへ新聞を届け、報告する。 3 学習の振り返りをする。	② ② ①

ウ 実践事例における考察

○ 探究的な学習の過程の充実

3・4年生4名での指導する単元を「第一次・第二次」と「第三次・第四次」の2段階構成とした。前半でふるさとの伝統文化を引き継いでいる人材を活用した学習を位置付け、後半で学校再開先の地域における課題追究の可能性を探り、避難先の地もふるさとと考へ、その地に生きる人々からも学びながら、探究の学習活動の充実を図り、課題を解決する資質や能力を高めようと計画している。

現在の地域のおかれている特異な状況下において、可能な限りの地域素材を活用しながら、どちらも子どもたちが成長するふるさとと考へ、ふるさととのつながりの中で、課題を解決する資質や能力を高めるねらいに沿った計画となっている。

○ 本物と出合う探究的な学習の工夫

3・4年生は、浪江町での小学校経験のない子どもたちである。学区はもちろん、浪江町についての記憶にも限りがあり、家族からの調査などから特に記憶に残っている物が頼りであったが、津島地区の子どもたちが食べていたかぼちゃ饅頭への関心が高いことがわかった。実際に、避難先でも作り続けている人材を見つけ、直接、作り方を教わり、試食しながら、様々な情報を得ることができ、課題追究の意欲が高まった。



【講師に作り方を習う子どもたち】

使用した思考ツールは、発達段階や個人の能力を考慮し、基本的なツールを使ったが少人数の中でも、互いの考えが可視化されるとともに、協同で学ぶ姿勢にもつながった。

○ 「まるごとふるさと浪江博物館」としての学習過程の可視化

探究的な学習過程の記録や思考ツールの結果を、学習のつながりがわかるように掲示することで、追究の意欲が持続するとともに、学習そのものを可視化することで、校内で学習を共有することができ、互いの指導法の研究にも効果を発揮した。



【探究的な学習過程の記録や思考ツールの結果の掲示】

○ 子どもたちの作った新聞の記述から

本校の「ふるさとなみえ科」のまとめ・表現の過程では、言語活動との関連を図った取組をしている。その一つが新聞づくりである。多くの人に発信する手段としての新聞づくり自体に魅力があり、次第に書くことに対する抵抗がなくなっている。

新聞はグループで話し合わなければ完成しないため、嫌でもコミュニケーションをとらざるを得ない。見出しや構成、絵や写真の選定、調査結果のグラフ等、多様な要素を含んでいるが、完成後には、全校生の前で記事を読み、苦労したところや工夫したところを発表している。他の児童が感想を発表するなど、「話す、聞く、読む、書く」のすべての言語活動が網羅されることになり、新聞づくりを通して言語活動の充実を図ることができる。



【協力して作った新聞】

見出し1 「誕生の秘密」 どうしてできたの？

○児童H 「子どもを思う気持ちと、地元のものを使ったアイデアから生まれたよ」

見出し2 「おいしさの秘密」

○児童K 「甘さを押さえたかぼちゃの生地と甘いあんこのバランスがいいね」

○児童S 「水の量を調整して、耳たぶの柔らかさにして一晩寝かせるよ」

見出し3 「愛されている秘密」

○児童E 「体によくて、やさしい味。たくさんの人に食べてもらいたいという思いが込められているんだね。」

アンケート 「仮設訪問時に浪江の人にかぼちゃ饅頭について調査」

- Q1 かぼちゃ饅頭を知っていますか？ はい 100%
- Q2 かぼちゃ饅頭を食べたことがありますか？ はい 100%
- Q3 かぼちゃ饅頭の好きなのところは？
1位 あんこ 2位 甘過ぎないところ 3位 かぼちゃが入っているところ

③ 実践事例2

単元名 「ふるさとの伝統文化（伝統芸能）」

～わたしの町の自慢の伝統文化～5・6年生 30時間

ア 単元の目標

ふるさと浪江には、地域ごとの自然や文化との関係により、特色ある伝統文化が存在したが、残念ながら、そのほとんどが避難により、存続が難しい状況にある。中には、請戸地区の「田植え踊り」のように現在も避難先で引き継がれているものもある。

そのような状況の中、ふるさとの伝統文化に触れながら、子どもたちがふるさと浪江の「ひと・もの・こと」と関わり、つながることと併せて、避難先の二本松市の伝統文化と比較することで、主体的に探究的な学習活動を展開し、ふるさとの未来を拓く資質・能力を高めることができる。

2つの地域におけるふるさとの伝統文化を引き継ぐ人への調査活動や、体験活動を通して、協働で課題を追究し、新聞にまとめ発表したり発信することで表現力を高めることができる。

イ 単元指導計画・探究的な学習の過程

主な過程	学習内容・学習活動の流れ <思考ツール>
課題設定	第一次 浪江の伝統文化について、調べる課題をつくろう（1） 省略
	第二次 津島地区で引き継がれている「三匹獅子」調査をしよう（14） 省略
課題設定	第三次 二本松の伝統文化を調べ、ふるさとの伝統文化についての学習を深めよう（10）
情報収集	1 ふるさとの伝統文化について、どのように引き継がれているのか話し合い、もっと調べたいことをメモに書き出す。 KJ法 ①
	2 メモをもとにウェビングで課題づくりをする。 ②
	3 ふるさとの伝統文化について、二本松の和紙伝承館を訪問し、和紙づくりを体験し、伝統文化について調べる。 ③
整理分析	4 ふるさとの伝統文化を生かすために何ができるのかについて、これまでの学習も振り返り、調べた内容を整理する。 ②
	5 和紙づくりを生かしたり、伝統芸能で体験したものや制作したものの展示しふるさとの人に紹介する。 ②
まとめ・表現	第四次 「ふるさと伝統文化新聞」をつくろう（5）
	1 2つのふるさとの伝統文化の学習から新聞をつくる。 ②
	2 三匹獅子の指導者や二本松の和紙伝承館に新聞を届け、報告する。 ②
	3 学習の振り返りをする。 ①

ウ 実践事例における考察

○ 本物と出合う探究的な学習過程の充実

5・6年生での指導する単元を「第一次・第二次」と「第三次・第四次」の2段構成とした。前半でふるさとの伝統文化の継承に課題を抱えている人材を活用した学習「津島の三匹獅子」を位置付けた。後半では、学校再開先の地域における課題追究の可能性を探るため、二本松に伝わる和紙づくりに生きる人々からも学びながら、探究の学習過程の充実を図り、課題を解決する資質・能力を高めようと計画した。思考ツールとしては、仮設住宅を訪問し、浪江の人々にインタビューした内容をもとにKJ法やベン図等を活用し、集めた情報を話し合いの中で整理した。

○ 子どもたちの作った新聞の記述から

5・6年生の新聞作成は、体験した内容や整理した情報を個人新聞づくりとしてまとめを行った。特に、二本松の上川崎和紙の伝統を引き継ぐ若い女性から聞いた話や実際の紙漉き体験をもとに、伝統文化を引き継ぐ志に関する記述が多く見られた。



【津島の三匹獅子の説明をする講師】



【二本松和紙伝承館での紙すき体験】

Ⅲ 「ふるさとなみえ科」5年間の実践を振り返って

本校のように東日本大震災と原子力発電所事故による長期の避難、新たな場所での学校再開・学校運営という例は、過去に例を見ない。教育の土台である地域と学校が引き離され、学習の機会を失いかけていた子どもたちを前に、教師が創り上げたのが「ふるさとなみえ科」である。ふるさと喪失という先の見えない問題に直面し、喫緊の課題として、子どもたちに「ふるさとへの誇りを持ち、自ら課題を追究し、生き抜く力を育てたい」の思いが結実したのが「ふるさとなみえ科」であり、「小さな学校で大きな感動」を学校経営の中心に据える本校において、大きな成果をあげてきた。

1 特に成果がみられるもの

- ふるさとの現状から将来を見据え、双葉郡教育復興ビジョンとの整合性を図り、教育目標の「なみえを愛し みらいに向かって えがおで生きる子ども」で育む資質・能力を明確にして、困難な課題に挑戦し、未来を創る力を育成する教育課程をとおして実践することができた。
- 総合的な学習の時間における学習過程において、課題解決のために地域の「ひと、もの、こと」を生かし、人々との交流の機会を取り入れ、探究的な学習過程を工夫した指導計画を作成し、実践している。
次期学習指導要領の答申に示されている「社会に開かれた教育課程」の内容や「カリキュラム・マネジメント」につながる実践ともいえる。
- 校舎内を「まるごとふるさとなみえ博物館」ととらえ、常時、「ふるさとなみえ科」の学習状況が見渡せるような学習環境づくりを進めている。学習の成果としての新聞やカルタの展示など、発表・展示を工夫しながら、教科等の枠を越えた学習過程の可視化、発表力の充実がみられる。

2 「ふるさとなみえ科」探究の在り方の成果

① 総合的な学習の時間への組織的な指導体制づくり

本実践では、「ふるさと創造学」での教員研修会の情報共有を取り入れ、視学官等からの貴重な講義内容をもとに、自校の「ふるさとなみえ科」の取組をいかに充実させるかについて、教職員が一丸となって取り組んできた。

また、「双葉郡教育復興ビジョン」や「ふるさと創造学」についての理解を図りながら、自校の教育活動との関係を明らかにし、未来のふるさとを拓く子どもたちの育成をめざして実践できたことも大きな成果といえる。

② 避難という学習環境での課題追究の新たな可能性

浪江町と避難先の二本松市の2つの地域との関係を大切にしながら、探究的な学習過程を工夫することが可能となり、ふるさとの課題追究において、それぞれの「ひと、もの、こと」を活用したアクティブ・ラーニングで、深まりのある学習が展開できた。

③ 学習の可視化と学びの環境づくり

「まるごとふるさと浪江博物館」づくりの中で、総合的な学習の時間の学習内容の展示が学習状況の可視化を可能とし、単に成果物を展示するだけにとどまらず、付箋による相互評価等、学習の広がりも見られる。また、県立博物館学芸員の指導を受け、見る側の立場に立った展示の工夫にも取り組んでいる。

③ 学習後の子どもたちの思い

「かぼちゃまんじゅう誕生の秘密」

・子どもを思う気持ち、地元の余った食材、元気な黄色、幸せな黄色

「なぜ、今かぼちゃまんじゅうを作っているの？」

- ・体にいいので子どもからお年寄りまで、みんなにたくさん食べてほしい・・・
- ・これからは、浪江の人と避難先の飯坂の人たちと協力して作っていききたい・・・
- ・加工場を作って売れるようにしたい・・・

以上は、子どもたちと講師との話し合いの一部である。実際に、かぼちゃ饅頭づくりを体験し、試食したからこそそのふるさとへの思いが読み取れる。

3 学習の成果普及・受賞等

○ 「持続可能な開発のための教育」日本の優良事例30に選定

2014年10月に開かれた「国連持続可能な開発のための教育の10年」関係省庁連絡会議において、日本の優良事例30に取り上げられた。ユネスコが提唱する持続可能な開発のための教育(ESD)の理念とも通じるものがある。

○ なみえっ子カルタの制作・普及

2015年、福島大学うつくしまふくしま未来支援センターの「福島めばえ助成金」を活用し、「なみえっ子カルタ」を印刷して町に贈呈し、仮設住宅など地域の拠点となる所に配付していただいた。小規模な学校ながら全町避難の続く浪江町にとって、改めて町立学校の存在を感じてもらえる機会となった。

制作したカルタは、「ふるさとなみえ科」の仮設住宅訪問時に住民と交流する際に活用している。また、浪江町教育委員会が46の絵札・読み札を印刷したクリアファイルを作り、町内全世帯に配付してくださったので、浪江の人に笑顔届けたいという子どもたちの願いが叶えられた。



【町長さんとのカルタとり】

○ 浪江の皆さんに笑顔と元気を届ける「んだげんちょ」制作

2015年、地元にもつわる多くの楽曲を発表している福井県在住のレゲエ・シンガー、Sing J Roy 氏の協力を得て、ふるさと浪江の風土や方言など、魅力いっぱいの歌作りに取り組んだ。その後、できあがった歌に振り付けてダンスに仕上げ、運動会や十日市祭で町民の方に披露してきた。

2016年には、ダンススクールの講師を迎え、本格的なヒップポップ調のダンスに発展させてレッスンを重ね、衣装も新調して十日市祭で披露した。

今後は、浪江のゆるキャラ「うけどん」とのコラボダンスの映像も収録したDVDを制作し、浪江町の皆さんに元気を届けたいと考えている。



【うけどんと踊る「んだげんちょ」】

○ 第31回時事通信社「教育奨励賞」努力賞受賞

創造性に富んだ特色ある教育で顕著な成果を挙げた学校をたたえる、第31回教育奨励賞(文部科学省後援、公益財団法人新聞通信調査会協賛)の受賞校に選ばれた。

<評価寸評>

避難生活の中で、地域の産業、伝統文化、伝統工芸品などを掘り起こし、調べ、表現し、避難住民を元気づけ、自ら調べる力、コミュニケーション力、表現力を育て、郷土を愛する心を育てるといふ、たくましい実践である。避難先の文化とふるさとの比較文化など、豊かな文化への接近法など成果がみられる。何よりも子どもが逆に大人を元気づけるといふ学習の力こそ注目される。

○ 「ふるさと創造学サミット」での成果発表

「ふるさと創造学サミット」は、双葉郡の子どもたちが連携して学ぶ場である。今年度で第3回を迎えたサミットの会場で「ふるさとなみえ科」の学びを大勢の前で堂々と発表する子どもたちの姿から、変化と向き合い、学校や町村の枠を超えた学びを支援することが、未来を創造する子どもの成長に繋がることを改めて感じた。

当日はポスターセッションでの双方向の交流を取り入れた発表ブースで、出張「まるごとふるさとなみえ博物館」をテーマに、子ども学芸員に扮して幅広い年代層の参観者を魅了した。

4 児童の顕著な変容等

- ふるさとと学校をつなぐ、本物との出会いを大切にした人々との交流による課題設定の工夫により、子どもたちの課題解決に向かう探求心や挑戦心を刺激し、課題解決を自分のものとして意識できるようになってきた。学習における様々な課題に出会い、「なぜ」という疑問や「こうしたい」「もっとこうなりたい」という願いが高まり、協働で課題解決に取り組み資質・能力を発揮する姿が見られるようになった。
- まとめ・表現の過程では、言語活動との関連を図った取組をしている。その一つが新聞づくりである。多くの人に発信する手段としての新聞づくり自体に魅力があり、次第に書くことに対する抵抗がなくなっている。
- ふるさとを誇りに思う心、地域の方々に対する思いやりの心が育っている。また、自分にできることは何かについて考え、未来を見つめ、将来への夢を抱いている。
- 「まるごとふるさと浪江博物館」の子ども学芸員として、県立博物館の学芸員の指導を受けながら、見る側の立場に立った作品の発表や展示を工夫している。
- 学校再開直後に比べ、欠席する日数もきわめて少なくなり、学ぶ喜びを感じている。また、自分達の学習が、地域の多くの方々に評価され、自分に自信が持てるようになり、自尊心が高まってきている。
- 対外的な作文コンクール・読書感想文コンクールや俳句・川柳コンクール等において受賞するなど良好な成績を取っている。



【まるごとふるさとなみえ博物館の展示】

IV 「ふるさとなみえ科」5年間を振り返って

本校では、遠く離れてしまったふるさとの豊かな自然や、伝統、文化を子どもたちの心に残すため、平成24年度から、郷土を学ぶ学習を教育の柱に据え、「ふるさとなみえ科」に取り組んできた。総合的な学習の時間を中心に「ふるさとのよさを発見する・伝統文化を学ぶ・浪江町の人々と交流する・ふるさとの未来を発見する」の4点を軸に進めた学習活動とあわせ、離ればなれになった浪江町の皆様や避難先の二本松市の皆様との交流をとおり、子どもたちはふるさと浪江への誇りをもち、たくましく成長しつつある。

伝統ある大堀相馬焼の制作や郷土の食文化の体験をとおり、ふるさとの伝統や文化を学び、新聞としてまとめたり、「なみえっ子カルタ」づくりに取り組んできた。また、仮設住宅訪問や十日市祭で、浪江町の人々と交流を深めた。こうした学習活動を重ねることで、子どもたちは、浪江町の人々のふるさとへの思いを知り、ふるさとを誇りに感じ、ふるさとのために自分ができることは何かを考えるようになってきた。同時に、子どもたちの学習が、ふるさとを離れた浪江町の人々に大きな感動を与えることができた。

現在、避難指示解除に向け、帰還後の浪江町の小・中学校の有り様が議論されている。先行きは不透明だが、はっきりしていることは、どんなに小さな学校でも、浪江町の学校で学びたいと考える子どもたちの選択肢となり得るような、小さな学校で大きな感動を生み出せる学校づくりに取り組んでいきたいと考えている。

平成29年2月

福島県双葉郡浪江町立浪江小学校 校長 遠藤 和雄
津島小学校 校長 郡司 博明

【参考文献】

- 文部科学省 小学校学習指導要領解説「総合的な学習の時間」
- 文部科学省 今、求められる力を高める総合的な学習の時間
- 文部科学省 言語活動の充実に関する指導事例集（小学校版）

子どもたちから大人たちへのメッセージ ～浪江の将来を願って～

子どもから大人まで遊べるような場所や浪江の子ども達がみんな一緒に勉強のできる学校をつくってほしいです。	漁業等の仕事がさかんな町です。今現在、仕事を無くした人がたくさんいるのでその人達の役に立ちたいし、私も自分の生まれ育った町で働きたいです。
復興は、なかよくみんなえがおで、1人1人が心に築き、浪江町民が安心して帰れること。また友達と笑って過ごせる幸せな日を取り戻して下さい。	大堀相馬焼や十日市など昔からの伝統を大切にして未来の子どもたちを安心してくらせる町にしてほしいです。
犯罪が少なく自然が美しい浪江町のよいところを生かして、とても楽しい町になってほしいです。私も浪江町のことを学んで役立ちたいです。	楽しい技術を手取り入れて、高ごしやすい土易戸介にしてほしいです。
私は、観光地がなくて有名で、きれいな町にしたいです。きれいな町にしたいです。そのために、たくさんの方が楽しめる所を造ってほしいです。	きれいな町にしたいです。きれいな町にしたいです。きれいな町にしたいです。
私は、みんなが楽しめるようなお店やイベントがある浪江町になってほしいと思います。苦しい思いがあると思うけれどみなさんが元気になるような町になってほしいです。	震災前よりも豊かでみんな元気で賑やかな町。そしてみんなの絆がふかまるようになってほしいです。みんながかんはりもつといい浪江町にしたいです。
大好きなふるさと浪江町が放射線が少なく安心して住めようになってほしいです。自然がたくさんありやすい町になるように早く進めてほしいです。	もしもどれたら線量が高くなったら自動的に除染してくれる機械があるといいです。耐震構造の家など、災害にも強い町をつくってほしいです。

現在二本松市に移転している浪江小学校の6年生12名から、なみえの復興や文化などについての学習(ふるさとなみえ科)を行っている中でいただいたメッセージです。

6. 地域をつなげる「ふるさとなみえ科」をめざす

福島県双葉郡浪江町立 浪江小学校

<活動の概要>

東日本大震災以前、浪江町には浪江小学校だけで558人、他の5校を合わせると千人を超える児童がいました。原発事故後は全国各地に避難しており、2011年8月1日に二本松市で再開した浪江小学校に戻ったのは30人です。現在は19名、約3.4%しか浪江小学校に通学していません。

ふるさを追われた子どもたちに自然豊かな風景や伝統文化を残すためには、本校での学びが町の復興に大いに活かされると考え、郷土を学ぶ学習を教育の柱として取り組んできました。

「ふるさとなみえ科」は、総合的な学習の時間や各教科との関連を意識した横断的・総合的な学習や探究的な学習を通して、浪江町の伝統文化を学び、浪江町の方と触れ合う機会を設けています。特に、体験的な学習時間を多く取り入れ、年間70～90時間取り組んでいます。



30年後の浪江町模型作り



大堀相馬焼体験



ふるさと浪江交流会

1 ESDとしての特徴

ふるさを追われた浪江町の子どもたちにとっては、新しい環境の中で生きていることを自覚することが大切です。今まで学校、家庭、地域の人々に見守られていた子どもたちですが、この環境下では、学校が中心となって地域をつなぐことが必要だと考えます。そこで、教育の場において、ESDの目標である持続可能な将来を実現できるような行動の変革をもたらすことが大切であると考えます。

2 活動の目的、ESD導入の経緯等

東日本大震災以降、子どもたちがこのまま浪江の地から離れ続けたとき、自然豊かな浪江町の美しい風景や伝統工芸である大堀相馬焼などが、どのくらい子どもたちの心の中に残っていくのだろうかと考え、今後の浪江小学校の在り方が浪江町の復興と大に関わっていくものと思われまふ。

そこで、「ふるさとなみえ科」を創設し、地域の素材や人材を活用して郷土を愛する心を育み、未来を創造的に生き抜くたくましい人間を育成するため、次の目的を掲げました。

- (1) 子ども一人一人に、(こころの)ふるさとへの太い根を張らせる。家庭・学校が大好きで仲良く生活し、自尊感情が豊かで生きるエネルギーにあふれた子どもや、地域の自然・伝統・文化にどっぷりつかり、好ましい原風景を持っている子どもの育成に努めていく。
- (2) 郷土の良さを守り引き継ぐ人々やふるさとのために活躍する人々の生き方に学び、子ども自身にも「志」を持たせる。単なる夢ではなく、どんなアスリートになりたいか、仕事を通してどんなことをしたいのか、どんな人間になりたいのか、「どんな」を考えさせることによって、子どもが取り組むべき課題を明確にさせていく。

3 これまでの成果 ～学校の中に「街」がある～

東日本大震災、原発事故以降、学校と地域が引き離されてしまった今、地域に変わり、避難先の学校が、地域文化を経験させる役割を担うことになりました。しかし、避難先でも、追われた地域の文化や伝統を維持しようと努力する人々があり、地域を離れても地域を作るという基盤は残されています。本校では、子どもたちが集まる場所すべてが学校、子どもと関わる人すべてが先生と考え、～学校の中に「街」がある～との基本構想のもと、ふるさと学習を進めてきました。

ふるさとなみえ科は、総合的な学習の時間を中心に、子どもたちが地域の伝統文化に触れたり、地域の人々と交流したりすることを中心に次の4つの柱で進めてきました。

(1) ふるさとの良さを発見する

町に関する文化や地域興しの方策などについて調べ、「なみえ子ども新聞」にまとめ、それを町の方に配布したり、表現活動の一環として子どもたちのふるさとへの思いを「なみえカルタ」に表したことが、改めてふるさとの風情や暮らしの良さを発見する機会となりました。

(2) ふるさとの伝統文化を学ぶ

伝統工芸品である大堀相馬焼の歴史や特徴を学び、カップや皿、湯飲み茶碗などを作りました。伝統文化を体験するだけでなく、ふるさを離れても伝統文化を維持しようとする人の心意気に触れることができました。また、学校で地域の伝統文化の学習は、その担い手に対して、自分の活動が評価され、生きがいを感じるという素直な喜びをもたらしました。

(3) ふるさとの人々と交流する

避難先にある仮設住宅を訪問して、子ども達が作成した「なみえカルタ」や昔遊びで浪江町の人々と交流しました。懐かしい名称が登場するカルタをとおして、不自由な避難生活をする町民に笑顔が戻りました。また、子どもたちがプランターに花を育て、春と秋の二回仮設住宅にプレゼントをし、ふるさとの人々と交流を深めました。

(4) ふるさとの未来を考える

町の職員から浪江町復興計画の説明を聞き、帰還後についての議論が盛り上がり、「未来のふるさとなみえ」学習会にまで発展しました。ワークショップ方式で福祉、産業、商業、施設や復旧・復興に関して子どもたちが議論し、子ども達によって「三十年後の浪江町」の姿を創り上げ、大学の建築科の学生の協力を得て、立体模型で再現し、町民に披露しました。

4 今後の展望・課題等

ふるさとなみえ科は、教科等の枠を超え、探究的、協同的な学習の場となっています。また、教師が教材開発をし、新しいカリキュラムを作成していく面白さもあります。地域の人々が学校と連携し、子ども達を育てていく教育が可能となりました。

今後は、2年間築いてきたふるさとなみえ科の学習を基盤に、発達段階に応じた教材の選定や学習の進め方を考えていきたいと思っています。また、避難先の学校であることから、多くの浪江町民に触れ合うことで、町民の思いに触れ、自分の生き方を考える学習に結びつけたいと考えております。

お問い合わせ先

福島県双葉郡浪江町立 浪江小学校
 住所：〒969-1511 福島県二本松市下川崎字三島台1
 TEL：024-567-3970 FAX：024-567-6886
 MAIL：bz008611@bz04.plala.or.jp

なみえっ子カルタが完成するまで

平成23年8月に二本松市で学校が再開した翌年、平成24年度よりふるさとの素材や人材を活用し郷土のよさを学ぶために「ふるさとなみえ科」の学習が始まりました。このときから、学習の成果として「ふるさと浪江町」への想いをカルタに表してきました。平成27年度は、「自分たちが作ったふるさとのカルタで浪江の皆さんに元気になってほしい。」子どもたちのこのような願いを込めて、カルタ作りの集大成として「なみえっ子カルタ」の完成をめざしました。浪江小・津島小児童15人が、今年度の「ふるさとなみえ科」の学習で、前年度までの卒業生も含めて作ったカルタをあらためて描き直し、およそ200枚の中から、地区やジャンルのバランスを考えながら50音順に46枚を選定しました。



いよいよカルタの制作です。今回は絵本作家の飯野和好様をお招きし、子どもたちへ絵のポイントなどをご指導いただきました。子どもたちはふるさと浪江に想いを寄せながら一枚一枚ていねいに仕上げていきました。完成した「なみえっ子カルタ」は卒業生や仮設住宅、ご支援いただいている多くの方々、そして浪江町役場に寄贈いたしました。



なみえっ子カルタ50音・ジャンル一覧

50音	ジャンル	読み	札	ジャンル	50音	札
あ	祭	あ	安波祭	祭	あ	安波祭
い	社	い	い	社	い	い
う	社	う	う	社	う	う
え	社	え	え	社	え	え
お	社	お	お	社	お	お
か	社	か	か	社	か	か
き	社	き	き	社	き	き
く	社	く	く	社	く	く
け	社	け	け	社	け	け
こ	社	こ	こ	社	こ	こ
さ	社	さ	さ	社	さ	さ
し	社	し	し	社	し	し
す	社	す	す	社	す	す
せ	社	せ	せ	社	せ	せ
そ	社	そ	そ	社	そ	そ
た	社	た	た	社	た	た
ち	社	ち	ち	社	ち	ち
つ	社	つ	つ	社	つ	つ
て	社	て	て	社	て	て
と	社	と	と	社	と	と
な	社	な	な	社	な	な
に	社	に	に	社	に	に
ぬ	社	ぬ	ぬ	社	ぬ	ぬ
ね	社	ね	ね	社	ね	ね
の	社	の	の	社	の	の
は	祭	は	は	祭	は	は
ひ	祭	ひ	ひ	祭	ひ	ひ
ふ	祭	ふ	ふ	祭	ふ	ふ
へ	祭	へ	へ	祭	へ	へ
ほ	祭	ほ	ほ	祭	ほ	ほ
ま	祭	ま	ま	祭	ま	ま
み	祭	み	み	祭	み	み
む	祭	む	む	祭	む	む
め	祭	め	め	祭	め	め
も	祭	も	も	祭	も	も
や	祭	や	や	祭	や	や
ゆ	祭	ゆ	ゆ	祭	ゆ	ゆ
よ	祭	よ	よ	祭	よ	よ
ら	祭	ら	ら	祭	ら	ら
り	祭	り	り	祭	り	り
る	祭	る	る	祭	る	る
ろ	祭	ろ	ろ	祭	ろ	ろ
わ	祭	わ	わ	祭	わ	わ
を	祭	を	を	祭	を	を
ん	祭	ん	ん	祭	ん	ん
は	祭	は	は	祭	は	は
ひ	祭	ひ	ひ	祭	ひ	ひ
ふ	祭	ふ	ふ	祭	ふ	ふ
へ	祭	へ	へ	祭	へ	へ
ほ	祭	ほ	ほ	祭	ほ	ほ
ま	祭	ま	ま	祭	ま	ま
み	祭	み	み	祭	み	み
む	祭	む	む	祭	む	む
め	祭	め	め	祭	め	め
も	祭	も	も	祭	も	も
や	祭	や	や	祭	や	や
ゆ	祭	ゆ	ゆ	祭	ゆ	ゆ
よ	祭	よ	よ	祭	よ	よ
ら	祭	ら	ら	祭	ら	ら
り	祭	り	り	祭	り	り
る	祭	る	る	祭	る	る
ろ	祭	ろ	ろ	祭	ろ	ろ
わ	祭	わ	わ	祭	わ	わ
を	祭	を	を	祭	を	を
ん	祭	ん	ん	祭	ん	ん

伝統維持へ「ふるさとなみえ科」

第31回時事通信社「教育奨励賞」努力賞受賞校⑦

福島県浪江町立浪江小学校、津島小学校



東京電力福島第1原発事故で全域に避難指示が出ている福島県浪江町の町立浪江小学校(遠藤和雄校長、児童数9人)は、2012年4月から、町民や地元団体から地域の風土や伝統文化について話を聞き、郷土を学ぶ「ふるさとなみえ科」に取り組んでいる。14年度からは、学校再開を果たした町立津島小学校(郡司博明校長、児童数2人)も活動に加わった。

郷土を愛する心を育むとともに、復興に向けて頑張る町民と触れ合うことで、困難な避難生活に打ち勝つたくましさを身に付けさせるのが狙い。学習成果は仮設住宅や地域行事などでも披露され、避難生活に苦しむ町民の心の支えにもなっている。浪江小の遠藤校長は「ふるさとに誇りを持ち、どんな困難にも負けない子どもを一人でも多く育てたい」と話している。

避難生活への戸惑いがきっかけ

16年5月下旬、福島県二本松市にある市立旧下川崎小学校の校舎では、間借りしている浪江町立浪江、津島両小の3、4年の児童が、サケを使った「紅葉汁」の作り方や歴史などを学んでいた。



地元住民から「紅葉汁」を学ぶ児童

浪江町は、県沿岸部にある双葉郡最北端の町。約10キロ南には福島第1原発がある。太平洋から阿武隈山地までの東西約30キロの町に、東日本大震災時は約2万1400人が住んでいた。町を横切る請戸川周辺では稲作やサケ漁が行われ、町内の大堀地区では国指定の伝統的工芸品「大堀相馬焼」が作られていた。児童はこれらの文化を学校だけでなく、家庭や地域の人々との交流の中で

どの準備に取り組んだ。立ち上げに携わった大室さおり教諭は「初めは手探りだったが、子どもたちのため、必要な活動を積極的にやってみよう」と誰かが同じ思いで取り組んでいた」と振り返る。

交流に涙流す住民も

取り組みは、総合的な学習や国語などの時間を、年間70〜90時間行われる。浪江町の特徴や商店、自然について文章と絵で表した「なみえカルタ」作りや、町民らに取材し、地域の伝統などをまとめる「なみえ子ども新聞」制作、地域の伝統工芸である「大堀相馬焼」体験など、内容は多岐に渡る。

授業は「探究的な学習」と「地域の人々との交流」に大別できる。このうち、探究的な学習は、家族との会話などから興味がある地域の伝統文化などをテーマに選び、調べた上で、手作りの新聞や発表会で報告する取り組み。課題を見つける力や情報を収集する力を育むのが狙いで、授業時間は計30時間に及ぶ。

一例を挙げると、浪江、津島両小の3〜6年生は14年度、請戸地区に約300年前から伝わる「安波祭」について調査。家族や地元の人へのインタビューで得た情報を基に、祭りに関する知識や疑問点をメモに書き出す。請戸芸能保存会の渡部忍会長をゲスト講師に招き、歴史や継承に関する話や疑問点を取材し、集まった情報を整理し、「なみえ子ども新聞」にまとめ、町役場や町の診療所などに掲示したという。これまでの4年間で、

自然に学んできた。

しかし、11年3月に原発事故が発生。事故当時の風向きの影響で、原発20キロ圏内だけでなく、圏外の町西部にも放射性物質が降り注いだ。国の避難指示区域に町全域が指定され、町民は全国各地に避難した。現在も町の方針により、15歳未満の町内への立ち入りは制限されている。

震災当時から町の教育長を務める畠山熙一郎氏は「原発事故で町の平穏が破られた。将来の帰還時期も見通すことができず、地域全体が混沌としていた」と振り返る。町内にある六つの小学校は臨時休業したが、浪江小が11年8月、二本松市内で児童の受け入れ先として再開した。児童数は、震災前の計1162人から29人に激減した。

畠山教育長が児童数減少よりつらかったのは、不安や戸惑いが曇らす子どもたちの表情を見ることだったという。「友人と離れ離れになるだけでなく、それまで同居していた祖父母や父親とも分かれて住まざるを得なくなった」と言い、急激な環境の変化が「子どもたちに大きな負荷を与えた」と推測する。

「この困難に負けない、生きる力や強さを身に付けてほしい」。畠山教育長が発案したのは、復興に向け頑張る人々との触れ合いを通じ、「児童がふるさとへの思いを強く持つことができる教育」を行うことだった。

教育長の案を基に、浪江小は12年4月から取り組みを始める方針を決定。教員12人で、町に関する資料収集やインターネットの整備、講師手配な

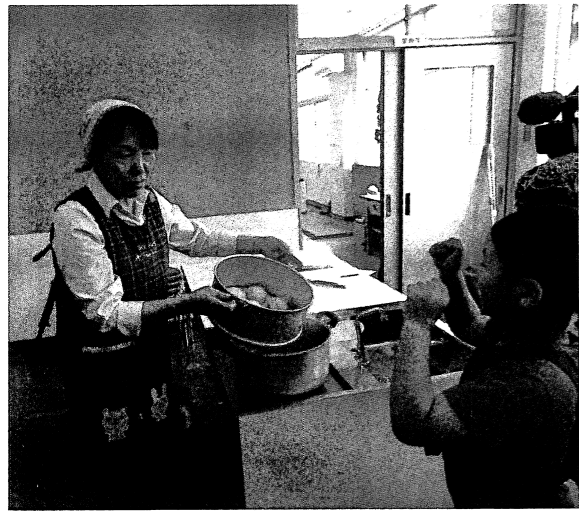
大堀相馬焼や浪江やきそばなどをテーマとして取り上げてきた。15年度からは児童の発達段階に応じた学習を進めるため、テーマを3、4年生は「食」、5、6年生は「伝統文化」に分けた。代わりに、避難生活が長くなったため、仮校舎がある二本松市の食や伝統文化についても調べ、浪江町の文化と比較させ「物事を多面的に見る力」を育てた。

大室教諭は「15年度は、二本松市の食や同市上川崎地区に伝わる和紙作りを体験し、それぞれの良さや込められている願いが同じであると学習した」と説明。「他地域と比較することで、自分たちのふるさとの魅力を再発見すると同時に他地域の良さも理解したのではないかと期待する。

地域の人々との関わりでは、仮設住宅の住民と交流するほか、浪江町の伝統行事「十日市祭」へ参加。「町の人たちと交流することで、子どもたちの役割を認識してもらおう」のが狙いで、計40時間を費やす。

地域の人との交流では、毎年5、6月と11、12月に分けて仮設住宅や老人ホームなどを訪問してきた。16年度は、福島、二本松、本宮の3市にある計5カ所を訪問する。児童は、地元で伝わる昔話「甚六の狐退治」などを題材にした紙芝居やよさこい踊りなどを披露。また、カルタ遊びを通して、避難者との交流を図る。十日市祭では、双葉郡に伝わる「標葉せんだん太鼓」や町方言を歌詞にしたレゲエ調の曲「んだげんちよ」、製作した大堀相馬焼の皿、湯飲み茶碗などを披露する。

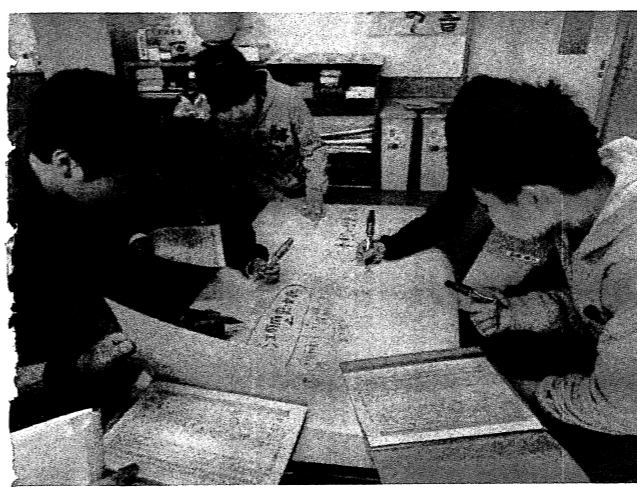
避難生活の長期化や放射線に対する健康不安などから児童数を維持できるか不透明な状況だが、遠藤校長は「ふるさとなみえ科の授業はこれまで同様に行っていく。授業内容の工夫や改善を図り、小さい学校だからこそ行える、魅力的な授業を追求していきたい」と結んだ。(山田将司 福島支局)



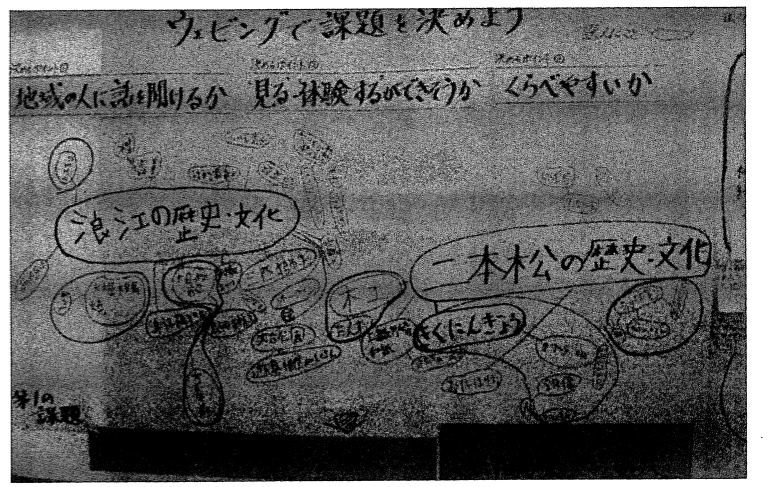
かぼちゃまんじゅうを実際に作って味わう。



大堀相馬焼を体験する子どもたち。



調べたことをもとにして、ウェビングを使って整理する子どもたち。



ウェビングを使い、浪江町と二本松市を比較する。

**子どもが変わると、教師が変わり
保護者や地域の人も変わる**

子どもたちは、こうしたふるさとの学びを通して、地域に何かできないかという思いをもってきたと大室教諭は話す。

「仮設住宅にインタビューに行っても、次に、『自分たちに期待するところはないか』といった言葉が出てくるようになります。そのような気持ちが高まり、『地元の大堀相馬焼(焼き物)を学んで、世界に伝えたい』と言う子どもが出てきます。

あるいは、『んだげんちよ』という方言を使ったオリジナル曲に踊りをつけ、仮設住宅に住む人の運動不足解消に一役買ったり、地元の名所・名物を紹介するカルタづくりを行って、広めようとしたりもしています」

「特殊な環境にあるため、同年代の子ども同士の交流は限られるわけですが、その分、同じ町内で仮設住宅に住んでおられる方々とか、復興に携わる方々とか、多様な大人に関わっていく機会があります。その中で、相手の気持ちを分かろうとする力が育ま

ているのではないのでしょうか。

子どもたちが変わる(育つ)ことで、地域の方々や保護者にも変化をもたらしていると感じます。保護者も避難をして、大きな喪失感をもっているけれども、子どもたちが家に帰って『こんなことを勉強してきてよ』と話すことが、心の安定をもたらしていると感じます」と遠藤校長。

ふるさと創造学の運営に携わってきた、福島県双葉郡教育復興ビジョン推進協議会事務局の赤司展子さんも異口同音に話す。「子どもたちが地域について学び始めたことをきっかけに、震災前に途絶えていた伝統行事を復活しようという動きが出てきたり、伝統食に注目が集まるような動きも出てきたりして、地域にとっても新しい活力になっていると感じます。

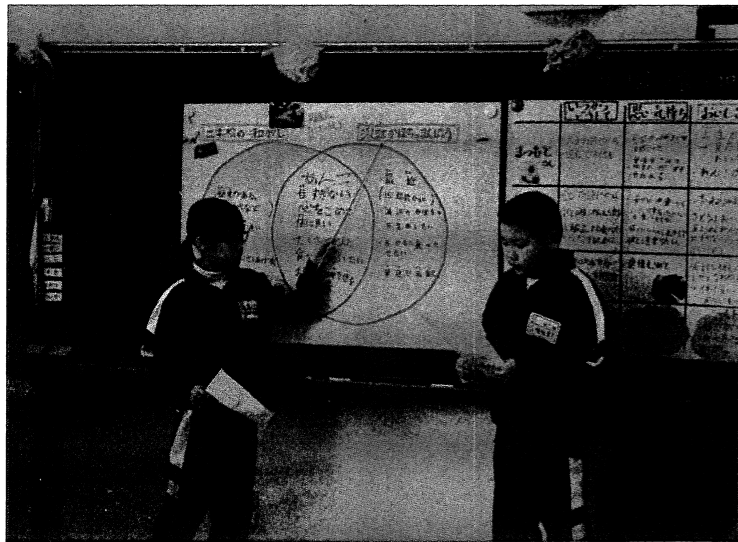
先生方も、変わってきました。私が2年前に福島に来て『ふるさと創造学』支援を始めた時には、新たな学びを創り出すことに不安を口にする先生もおられました。しかし、この実践を通して子どもたちが主体的に人と関わり学んでいくのと同時に、先生も主体的に教材開発をされているなど感じています」と赤司さん。

**ふるさとを学び、創造する学習は
福島だけに必要な学びではない**

遠藤校長は、これまでの取り組みを振り返りながら、こう話す。

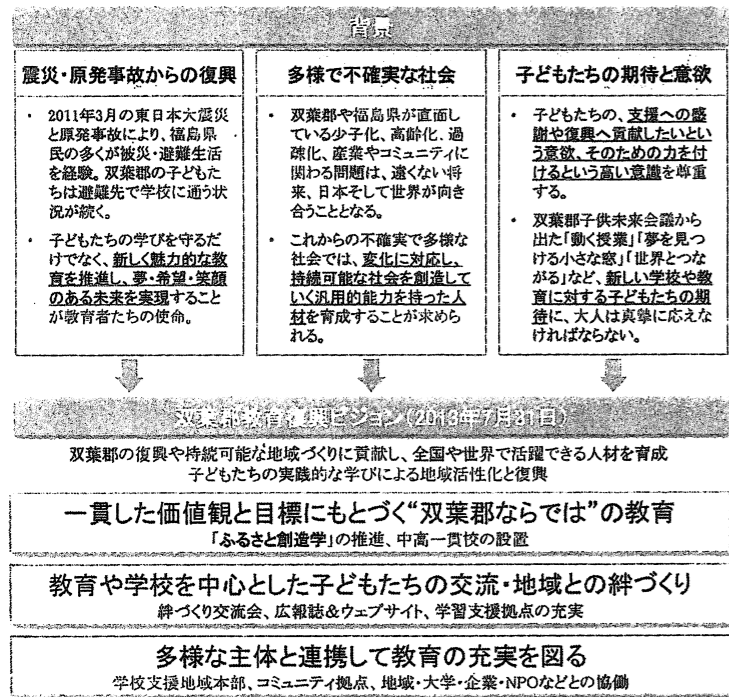
「既存の発想では、これは子どもたちにはちょっと難しいのではないかと思っていたことも、子ども自身が何とかしたいと思ったり、憧れをもったりして取り組めば、実際にできてしまうのです。やはり、総合的な学習と教科が互いに補完し合う(総合が学ぶ意欲のベースになり、教科が知識・技能等のベースになる)ことで、より多様な深い学びも可能になるのだと思います」

赤司さんは、サミットという場を設けたことも子どもの育ちにつながったと話す。「サミットではポスターセッションをしましたが、多くの学校が限られたエリアで行うため、声が小さかったり、発表方法や内容が面白そうに見えないと、人が集まってくれません。すると、子どもたちは自ら考えて、声をはって発表したり、宣伝をして人を集めたりと多様な工夫をしていました。このような、学校とは異なる場も学ぶ力につながっていくのだと思います」



ふるさとなみえ科を通して学んだことを発表する子どもたち。

【資料】ふるさと創造学の背景と基本構想



このような子どもたちの探究を支えるため、国語科で言葉の力を培ったり、社会科等との関連づけを行ったりと、カリキュラム・マネジメントを行ってきたと

大室さおり教諭はこう続ける。
「ふるさとなみえ科の学習では、『3・4年は食』『5・6年は伝統文化』と大きな枠組みは決めてありますが、その中で、何を学んでいくかは、子どもたちが決め、自ら調べ学びを深めていきます。そのため、思考ツールも多様な場面で活用しています。例えば、何について学ぶかを決める場面

では、家族に聞いたことや地域の方にインタビューしたことをもとに、3・4年生なら浪江町の食について知っていることをウエビングで出し合い、そこから「かぼちゃまんじゅうって何だろう」という興味関心が膨らんだところで、かぼちゃを使ったお菓子を作っていた津島地区の方に話を聞いたり、実際に作って味わったりしました。

そこから、さらに探究的に学び、二本松の伝統銘菓も調べ学んでいきました」
遠藤校長はこう続ける。
「子どもたちは、二つのふるさとを比較することで学びを深めていくのです。そして、お菓子ならお菓子そのものを学ぶというより、そこに込められた人々の願いを学んでいくわけです。だからこそ、お菓子を食べた時、子どもたちは、自然に『優しい甘さがある』と表現します。
しかも、それが学校の中の学びで終わるのではなく、『ふるさと創造学サミット』があることで、そこで発表したいという憧れももちながら、意欲的に取り組むことができるようになっています」

学習レポート④
ふるさとと、今住む町を学び、比較し
未来に向けた学びを創る「ふるさと創造学」
福島県双葉郡浪江町立浪江小学校ほか

東日本大震災と原発事故の影響を受け、今も多くの学校がふるさとを離れ、県内の各地に仮住を続けている、福島県双葉郡の小中高等学校。そんな学校が、離れたふるさとを学び、今住んでいる町を学びながら、地域の未来について考えるのが、「ふるさと創造学」だ。そのような学びを「ふるさとなみえ科」として最初に始めた、浪江町立浪江小学校（遠藤和雄校長・児童数8名）の実践を中心に紹介していく。

二つのふるさとを比較して思考し
人々の願いを学ぶ学習

まず、震災直後浪江小学校の校長として、ふるさとなみえ科を創り出した、富岡町の石井賢一教育長はこう話す。
「震災前、浪江小学校をはじめ、町内の6

小学校は生活空間が学区とほぼ等しく、学校にとって地域が学びの大きな支えであるとともに、地域の人にとっても学校が未来に向かう心の支えであったと思います。それが、震災によって他地域での生活を余儀なくされ、すぐには戻れないことが分かってくると、地域の方が、子どもたちにふるさとを忘れさせたくないと言うようになりました。しかし、生活経験が少ない子どもたちにふるさとを伝えるには、どうしても地域の人の力が必要になります。そのため、ちらばって住む地域の方を訪ね、招き、地域を学ぶという発想で、『ふるさとなみえ科』を開始しました。
言うならば、地域の中に学校があるのでなく、学校の中に地域があるという発想の転換をした学びでした。

やがて、ふるさとを離れた双葉郡の小中学校に同様の取り組みが広がり、取り組み全体を『ふるさと創造学』とする枠組みが整理され、一昨年度からは実践校が一堂に会して発表を行う、サミットを開催するようになったのです（資料参照）
では、「ふるさとなみえ科」とは、どのような学びなのだろうか。単元開発にも関わってきた遠藤校長はこう話す。
「現在、本校で学ぶ子どもたちにとって、今、学校がある二本松市が第一のふるさとになってきています。そこで、ふるさとなみえ科では、浪江町について学ぶだけでなく、二本松市についても学び、互いを比較することなどを通して、それぞれに対する学びを深めながら、将来に対する思いをもてるような学びをしてきています」



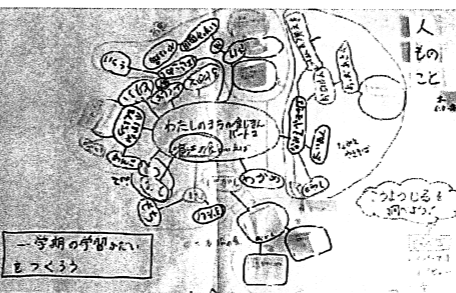
写真手前右より、遠藤和雄校長、大室さおり教諭、写真奥右より、石井賢一教育長、赤司展子さん。

学校名： 浪江町立浪江小学校																
学年： 3・4学年																
授業時間： 70時間（総合的な学習の時間「ふるさとなみえ科」）																
テーマ																
ふるさとの魅力を実感し、ふるさとを誇りに思う心、地域の方々に対する思いやりの心を育てていくことをテーマに、【わたしの町の「食」自まんⅠ・Ⅱ～くらべよう つながりを考えて～】という単元を設定した。浪江町の郷土料理である「紅葉汁」と、現在の学校再開地である二本松市の郷土料理「ざくざく」について、体験活動を通して調べたことを比較して考えたり、新聞にまとめて発信したり、さらにオリジナル郷土料理を考えて提案したりする。																
活動内容・手法																
<table border="1"> <tr> <td style="text-align: center;">課題設定</td> <td> <ul style="list-style-type: none"> ふるさと浪江の生活を思い出し、家族に聞いたことをもとに、「浪江町の食」について話し合い、メモをもとにウェビングで課題づくりをする。 ウェビングから、浪江町の「紅葉汁」について興味・関心を持ったことから学習課題として設定する。 </td> </tr> <tr> <td style="text-align: center;">情報収集</td> <td> <ul style="list-style-type: none"> 課題について、知っていることや疑問に思っていることを出し合いながらKJ法で整理し、もっと調べたいことをメモに書きだす。 ゲストティーチャーを招き、紅葉汁を実際に作ったり、疑問に思っていたことをインタビューしたりするなどの体験活動を行う。 仮設住宅訪問での浪江の人々の交流を通し、情報を集める。 </td> </tr> <tr> <td style="text-align: center;">整理・分析</td> <td> <ul style="list-style-type: none"> 体験したことをもとに、「紅葉汁」について発見したことやもっと調べたいことなど付箋に書きだし、分類・整理する。 </td> </tr> <tr> <td style="text-align: center;">まとめ・表現</td> <td> <ul style="list-style-type: none"> 紅葉汁について分かったことをテーマごとに分担し、協力して新聞をつくる。 「まるごとふるさとなみえ博物館」に展示する。 お世話になった方々に新聞を届け、報告する。 </td> </tr> <tr> <td style="text-align: center;">課題の見直し</td> <td> <ul style="list-style-type: none"> 自分たちの学校がある二本松市には、どんな「食」があるか出し合い、調べたいことを付箋に書き出し、ウェビングで課題づくりをする。 紅葉汁と比較して考えるため、二本松市の「ざくざく」を課題に設定する。 </td> </tr> <tr> <td style="text-align: center;">情報収集</td> <td> <ul style="list-style-type: none"> ゲストティーチャーを招き、「ざくざく」を実際に作ったり、疑問に思っていたことをインタビューしたりするなどの体験活動を行う。 </td> </tr> <tr> <td style="text-align: center;">整理・分析</td> <td> <ul style="list-style-type: none"> 浪江の「紅葉汁」と二本松の「ざくざく」との共通点や相違点を、ベン図で整理しながら明らかにし、地域に根ざした食に込められた思いについて考え、まとめる。 </td> </tr> <tr> <td style="text-align: center;">まとめ・表現</td> <td> <ul style="list-style-type: none"> 「ふるさと創造学サミット」で学習成果を展示する。 「ふるさとなみえ発表会」で一年間の学びを保護者や浪江の人々に発信する。 これまでの食の学習から、自分たちのオリジナル郷土料理を考えて、教えていただいた人々に提案する。 </td> </tr> </table>	課題設定	<ul style="list-style-type: none"> ふるさと浪江の生活を思い出し、家族に聞いたことをもとに、「浪江町の食」について話し合い、メモをもとにウェビングで課題づくりをする。 ウェビングから、浪江町の「紅葉汁」について興味・関心を持ったことから学習課題として設定する。 	情報収集	<ul style="list-style-type: none"> 課題について、知っていることや疑問に思っていることを出し合いながらKJ法で整理し、もっと調べたいことをメモに書きだす。 ゲストティーチャーを招き、紅葉汁を実際に作ったり、疑問に思っていたことをインタビューしたりするなどの体験活動を行う。 仮設住宅訪問での浪江の人々の交流を通し、情報を集める。 	整理・分析	<ul style="list-style-type: none"> 体験したことをもとに、「紅葉汁」について発見したことやもっと調べたいことなど付箋に書きだし、分類・整理する。 	まとめ・表現	<ul style="list-style-type: none"> 紅葉汁について分かったことをテーマごとに分担し、協力して新聞をつくる。 「まるごとふるさとなみえ博物館」に展示する。 お世話になった方々に新聞を届け、報告する。 	課題の見直し	<ul style="list-style-type: none"> 自分たちの学校がある二本松市には、どんな「食」があるか出し合い、調べたいことを付箋に書き出し、ウェビングで課題づくりをする。 紅葉汁と比較して考えるため、二本松市の「ざくざく」を課題に設定する。 	情報収集	<ul style="list-style-type: none"> ゲストティーチャーを招き、「ざくざく」を実際に作ったり、疑問に思っていたことをインタビューしたりするなどの体験活動を行う。 	整理・分析	<ul style="list-style-type: none"> 浪江の「紅葉汁」と二本松の「ざくざく」との共通点や相違点を、ベン図で整理しながら明らかにし、地域に根ざした食に込められた思いについて考え、まとめる。 	まとめ・表現	<ul style="list-style-type: none"> 「ふるさと創造学サミット」で学習成果を展示する。 「ふるさとなみえ発表会」で一年間の学びを保護者や浪江の人々に発信する。 これまでの食の学習から、自分たちのオリジナル郷土料理を考えて、教えていただいた人々に提案する。
課題設定	<ul style="list-style-type: none"> ふるさと浪江の生活を思い出し、家族に聞いたことをもとに、「浪江町の食」について話し合い、メモをもとにウェビングで課題づくりをする。 ウェビングから、浪江町の「紅葉汁」について興味・関心を持ったことから学習課題として設定する。 															
情報収集	<ul style="list-style-type: none"> 課題について、知っていることや疑問に思っていることを出し合いながらKJ法で整理し、もっと調べたいことをメモに書きだす。 ゲストティーチャーを招き、紅葉汁を実際に作ったり、疑問に思っていたことをインタビューしたりするなどの体験活動を行う。 仮設住宅訪問での浪江の人々の交流を通し、情報を集める。 															
整理・分析	<ul style="list-style-type: none"> 体験したことをもとに、「紅葉汁」について発見したことやもっと調べたいことなど付箋に書きだし、分類・整理する。 															
まとめ・表現	<ul style="list-style-type: none"> 紅葉汁について分かったことをテーマごとに分担し、協力して新聞をつくる。 「まるごとふるさとなみえ博物館」に展示する。 お世話になった方々に新聞を届け、報告する。 															
課題の見直し	<ul style="list-style-type: none"> 自分たちの学校がある二本松市には、どんな「食」があるか出し合い、調べたいことを付箋に書き出し、ウェビングで課題づくりをする。 紅葉汁と比較して考えるため、二本松市の「ざくざく」を課題に設定する。 															
情報収集	<ul style="list-style-type: none"> ゲストティーチャーを招き、「ざくざく」を実際に作ったり、疑問に思っていたことをインタビューしたりするなどの体験活動を行う。 															
整理・分析	<ul style="list-style-type: none"> 浪江の「紅葉汁」と二本松の「ざくざく」との共通点や相違点を、ベン図で整理しながら明らかにし、地域に根ざした食に込められた思いについて考え、まとめる。 															
まとめ・表現	<ul style="list-style-type: none"> 「ふるさと創造学サミット」で学習成果を展示する。 「ふるさとなみえ発表会」で一年間の学びを保護者や浪江の人々に発信する。 これまでの食の学習から、自分たちのオリジナル郷土料理を考えて、教えていただいた人々に提案する。 															
ねらい（生徒像）																
<ul style="list-style-type: none"> ◆ 自ら課題を見付け、見通しを持ち、協力して探究的な学習に取り組む。 ◆ ふるさとの人々との交流を通して、学んだことを進んで発信する。 ◆ 学んだ成果から、ふるさとを誇りに思う気持ちと地域の人々への思いやりの心を持ち、自分の生き方考えることができる。 																

3・4年生の実践

わたしの町の食じまんⅠ・Ⅱ

3・4年生は、浪江町の食「紅葉汁」と二本松市の「ざくざく」について、体験活動を通し、比較しながら、課題を追究していった。二つの地域におけるふるさとの食を引き継ぐ人々の思いなどにふれることができた。



ウェビングで課題づくり



「紅葉汁」「ざくざく」作り

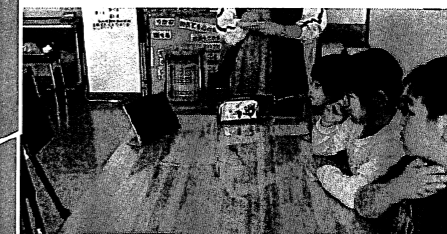


思考ツールを活用した学習内容の整理・分析



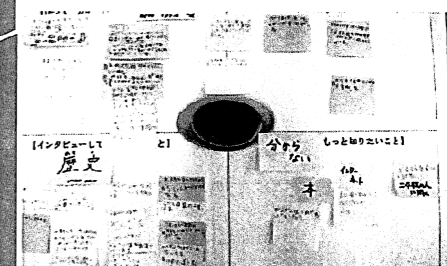
新聞にまとめて発表

課題設定



なみえタブレットを活用したTV電話によるインタビュー

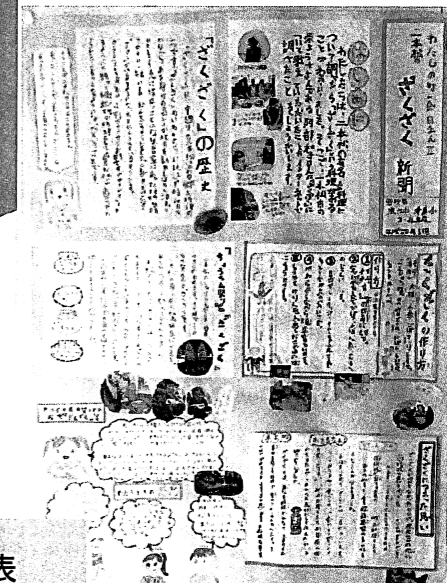
情報収集



KJ法による整理・分析

整理・分析

まとめ・表現



学校名： 浪江町立浪江小学校	
学年： 5・6学年	
授業時間： 70時間（総合的な学習の時間「ふるさとなみえ科」）	
テーマ	
ふるさとの魅力を実感し、ふるさとを誇りに思う心、地域の方々に対する思いやりの心を育てていくことをテーマに、【歴史や文化をさぐる～くらしをつなぐ～】という単元を設定した。浪江町の伝統工芸品である「大堀相馬焼」と、現在の学校再開地である二本松市の伝統工芸品「家具」について、体験活動を通して調べたことを比較して考えたり、新聞にまとめて発信したり、さらに二つのコラボレーション作品を制作したりする。	
活動内容・手法	
課題設定	<ul style="list-style-type: none"> 浪江町と二本松市の歴史や文化についてウェビングで書き出し、「地域の人に話が聞けるか」「見たり体験したりできるか」「比較できるか」の観点で課題をしぼる。 手作りの伝統工芸品で比べたいという思いから、浪江町の「大堀相馬焼」と二本松市の「家具」を調べていくこと、また個々の課題を決める。
情報収集	<ul style="list-style-type: none"> 課題について調べたことを付箋に書き、KJ法で整理すると、作っている人の思いがよく分からないことに気づく。 再開している窯元や協同組合へ行き、大堀相馬焼を実際に作ったり、インタビューしたりするなどの体験活動を行う。 仮設住宅訪問での浪江の人々の交流を通し、情報を集める。
整理・分析	<ul style="list-style-type: none"> 伝統を引き継ぐことや再開を決意した思いなど、インタビューを通して分かったことを付箋に書き、これまで整理してきた表に付け足していく。
まとめ・表現	<ul style="list-style-type: none"> 全体の構成を考え、また個々の課題を記事にし、協力して新聞をつくる。 新聞を「まるごとふるさとなみえ博物館」に展示したり、お世話になった方に届けたりする。
課題の見直し	<ul style="list-style-type: none"> 二本松市の「家具」について、パンフレット等の資料から調べたことを付箋に書いて整理し、詳しく調べていく課題について話し合う。
情報収集	<ul style="list-style-type: none"> 二本松家具店に行き、伝統工芸品である家具作りに込められた思いなどをインタビューしたり、鉋で木を削る等の体験活動を行う。
整理・分析	<ul style="list-style-type: none"> 「大堀相馬焼」と「二本松家具」の共通点や相違点を、ベン図で整理しながら明らかにし、伝統を受け継ぐ人々の思いは同じであることに気づく。
まとめ・表現	<ul style="list-style-type: none"> 「ふるさと創造学サミット」で学習の成果を展示・発表する。 「ふるさとなみえ発表会」で一年間の学びを保護者や浪江の人々に発信する。 二つの伝統工芸品のコラボレーション作品を制作し、教えていただいた方々に見ていただく。
ねらい（生徒像）	
<ul style="list-style-type: none"> 自ら課題を見付け、見直しを持ち、協力して探究的な学習に取り組む。 ふるさとの人々との交流を通して、学んだことを進んで発信する。 学んだ成果から、ふるさとを誇りに思う気持ちと地域の人々への思いやりの心を持ち、自分の生き方を考えることができる。 	

5・6年生の実践

歴史や文化をさぐる

5・6年生は、浪江町「大堀相馬焼」と二本松市「家具」について、体験活動を通して課題を追究していった。比較することで、伝統を受け継ぐ人々の共通した思いについて知ることができた。



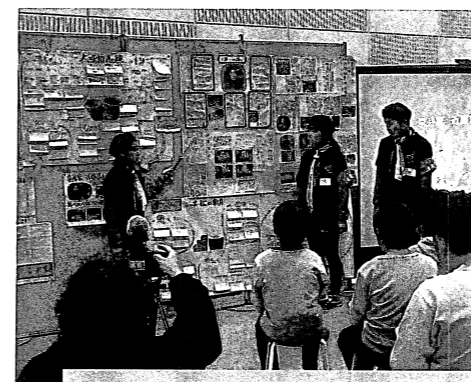
ウェビングで課題づくり



大堀相馬焼作り・インタビュー



ベン図で比較・分析



新聞にまとめて発表

課題設定



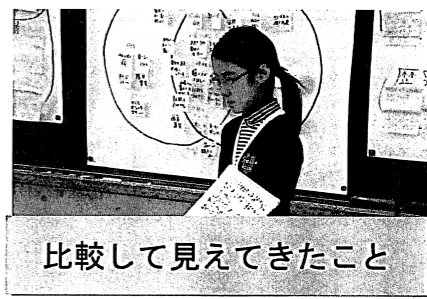
KJ法で整理し
新たな課題に気づく

情報収集



二本松家具木工体験・インタビュー

整理・分析



比較して見えてきたこと

まとめ・表現



二つの伝統のコラボレーション作品

ふるさとなみえの方言満載「んだげんちよ」

平成27年5月、復興支援の一環で福井県のレゲエ歌手SING・J・ROY氏が本校を訪れ、浪江町の思い出や名物を、方言を使って歌詞にちりばめた歌「んだげんちよ」(浜通りの方言で「そうだけど」の意味)を作成。それに本校の体育主任が動きを付け、運動会、仮設住宅訪問、浪江町伝統の祭事「十日市祭」での発表、双葉郡の小中学校が一斉に集い、各校の学習の成果を発表する「ふるさと創造学サミット」で披露してきた。さらに、平成28年度にはダンススクールの講師を招いてヒップホップ調のダンスに発展させた。浪江の人々を笑顔にしたいと子どもたちの思いが結実した「んだげんちよ」が浪江町の人々を、そして浪江町をさらに元気にする。

この活動は、ふるさとなみえ科での活動<①ふるさとの方との交流活動>と<③ふるさとのよさを考える>にあたる。

「んだげんちよ」 作詞：SING・J・ROYとなみえっ子 作曲：SING・J・ROY

んだげんちよ なみえっ子 めんげ
 んだげんちよ なみえっ子 さすけね
 んだげんちよ なみえっ子 おもせ
 んだげんちよ なみえっ子 んだべ

1
 ほっちゃいけ こさこ あんにやと
 しゃべってげ
 お茶のむが コトムくうが かぼちゃまん
 じゅうが
 はらくっち くわんに もう はらいっぺ
 んだげんちよ まんだ くうが
 もう やめとげ

サンブラさ いくべ はで なにかうべ
 チョコパンか あんパンか
 サン・メリーで
 くつしたか パンツか 洋服か
 ゲームほし カードほし それはおごらいる

んだげんちよ なみえっ子 めんげ
 んだげんちよ なみえっ子 さすけね
 んだげんちよ なみえっ子 おもせ
 んだげんちよ なみえっ子 んだべ

2
 幾世橋 大堀 浪江小学校
 苅野 請戸 津島小学校
 東中 津島中 浪江中学校
 いろいろあるけど いつも いっしょよ

十日市 あんばさま はだかまいり
 野馬追い せと市 大堀相馬焼
 太郎獅子 次郎獅子 三匹獅子
 どこさでも 売っている 浪江焼そば

んだげんちよ なみえっ子 めんげ
 んだげんちよ なみえっ子 さすけね
 んだげんちよ なみえっ子 おもせ
 んだげんちよ なみえっ子 んだべ



地域の夢・地域の未来をつなぐ

地域の学び・発信する

地域に触れて、感じる、考える

わたしの町の「食」自まんⅠ・Ⅱ
 ~くらべよう つながりを考えて~
 3・4年

浪江の人々との交流・学習成果の発信
 〇ふるさとなみえ交流会 〇十日市祭 他

伝統文化にふれようⅠ・Ⅱ
 ~くらべよう つながりを考えて~
 5・6年

【課題をつかむ】
 ○ ふるさとの自然や伝統文化を体験したり、地域の人から話を聞いたりして、興味関心・疑問を持つ。

【情報を集める】
 ○ 学習ゲームに関する団体や施設を訪問し、インタビューをする。
 ○ 地域の専門家の方と話を聞く。

【整理・分析する】
 ○ 体験活動を通して集めた情報を整理し、順序を付けたりする。
 ○ 集めた情報をマップや図等で分類・整理・分析する。

【まとめ・表現】
 ○ 作文や動画等にまとめた内容をまとめ表現する。
 ○ まとめた内容を地域のみなさんに報告・発信する。

【学習を支える柱】
 ・協同的な学び
 ・豊かな体験活動
 ・多様な言語活動

各教科との関連・まるごとふるさとなみえ博物館



平成28年度 第3回ふるさと創造学サミットより

〒969-1511 福島県二本松市下川崎字三島台1番地

浪江町立浪江小学校 TEL 024-567-3970 FAX 024-567-3979
E-mail:namie-e@fcs.ed.jp

浪江町立津島小学校 TEL 024-567-6860 FAX 024-567-6886
E-mail:tsushima-e@fcs.ed.jp